

ありがた迷惑行為に関する研究
—親子関係に着目して—

学校教育専攻
学校教育専修

土口 佳純

平成 25 年 2 月 13 日

目次

第1章 問題と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

1. 問題意識

1-1. 対人的トラブルにおける迷惑行為

1-2. 迷惑行為と認知される基準

2. ありがた迷惑行為

2-1. ありがた迷惑行為について

2-2. ありがた迷惑行為の不快感

2-3. ありがた迷惑行為の受け手

3. ありがた迷惑行為の受け手の特性—心理的リアクタンス特性—

4. ありがた迷惑行為の関係性

4-1. 親密性

4-2. 親子関係

5. ありがた迷惑行為の研究的意義

6. 本研究の目的

第2章 予備調査：ありがた迷惑行為の調査・・・・・・・・・・・・ 15

1. 予備調査の目的

2. 方法

I. 調査対象者

II. 調査時期

III. 手続き

IV. 調査内容

3. 結果

3-1. ありがた迷惑行為の分類

第3章 予備調査：考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

1. ありがた迷惑行為 4つのカテゴリー
2. ありがた迷惑行為における迷惑度と満足度
3. 受け手と行為者の関係性
4. 受け手の特性
5. ありがた迷惑行為の場面設定

第4章 本調査：ありがた迷惑行為の不快感と満足感、リアクタンス特性の関連・・・ 21

1. 目的
2. 仮説
3. 方法
 - I. 調査対象者
 - II. 調査時期
 - III. 手続き
 - IV. 使用尺度
 - V. 場面設定

第5章 本調査：結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

1. 尺度構成
2. 尺度間の相関係数
3. 場面ごとによるリアクタンス特性と不快感であるストレスの関連
4. リアクタンス下位尺度と不快感の関連
5. 不快感の質について場面ごとの検討
6. ありがた迷惑行為を受けた際の性差について影響の検討
7. 性差による満足度についての検討
8. 居住形態を考慮した分析
9. 居住形態による満足度についての検討

第6章 本調査：考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63

1. 受け手のリアクタンスの特性とストレスの関連
 - 1-1. 他者勝手行為におけるリアクタンス特性
 - 1-2. 過剰心配行為におけるリアクタンス特性
 - 1-3. リアクタンス特性「意思決定の自由」について
 - 1-4. 過剰心配場面における「直接的な自由回復の行使」と「干渉への認知」の交互作用
2. 不快感と満足度の検討
 - 2-1. 他者勝手行為の不快感と満足
 - 2-2. 過剰心配行為の不快感と満足
3. 性差についての検討
 - 3-1. 他者勝手行為における性差
 - 3-2. 過剰心配行為における性差
4. 居住形態の検討

第7章 今後の展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72

1. ありがた迷惑行為
2. リアクタンス特性と不快感
3. 性差と親子関係について
4. 調査方法において

引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78

付属資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

1. 予備調査で記述されたありがた迷惑行為
2. 予備調用の査質問紙
3. 本調査用の質問紙

第1章 問題と目的

1. 問題意識

1-1. 対人トラブルにおける迷惑行為

人は、何かしら社会的所属し多くの対人関係を築きながら生活している。集団生活を営む上で人との良好な対人関係や協調というものは、その集団を維持するためには必要な事であろう。しかし、社会的な集団に身を置く中では誰もが対人トラブルというものに遭遇する。対人トラブルにおける葛藤は人間的成長を促す場合もあるが、中にはその関係性や協調性を乱し、所属する集団や関係性の維持に困難をもたらすものもある。このような対人トラブルのひとつに迷惑行為が該当する。近年では、たばこのポイ捨てや路上駐車などの社会的な迷惑行為、約束を守らない、遅刻をするなどの日常的なものまで、多くの迷惑行為が問題として取り上げられるようになり、他者に害を与えるほどの逸脱した迷惑行為から、人によっては迷惑だと認知されない行為まで迷惑行為は多種多様である。これは、過去に比べ情報化社会が進み、個人の価値観や思想が多様になることで社会規範やルール・マナーなどの判断基準が曖昧になっているからだと考えられる。

このように、人が何を持って迷惑と判断しているのか、その判断基準や要因を検討することは、様々な価値観や情報が溢れる現代において必要なことであり、ルールやマナー、道徳観などが問われる社会において重要なことであると言える。よって、本研究ではこのような迷惑と判断する際の基準や要因について検討を行うこととする。

多くの迷惑行為がある中で、斎藤（1999）は公共の場で生起する迷惑行為を「社会的迷惑行為」と呼び「行為者が自己の欲求充足を第一に考えて、他者に不快な感情を生起させる行為」と定義した。この社会的迷惑行為は、公共の場で生起する迷惑行為に焦点を当てており、迷惑が生起する要因は多様である。この社会的迷惑行為の研究は、吉田・斎藤・北折（2009）によると、これまでに3つの立場から研究アプローチがなされていると言う。1つめは、迷惑行為を行う行為者の立場からみた「行為者側」、2つめは迷惑行為の受け手の立場からみた「認知者側」、環境や組織風土などの状況要因から見た「状況要因側」などが、これまでの社会的迷惑行為における研究アプローチとしてあげられる。

迷惑行為者には「相手が迷惑だと認識していながら迷惑行為を生起する者」、「相手が迷惑だとは思っておらず知らずに迷惑行為を生起する者」と2種類に分けられる。前者の場合、相手が迷惑であると認識していながら迷惑をかけるタイプであり悪質とも言える。こ

の場合、行為者側からのアプローチにより思いやりや共感性、規範意識などを高めるなどの研究が行なわれているのに対し、後者のタイプは自分の行動が迷惑に思われているなどと気が付いていないため、行為者側に直接働きかける事は困難であると予想される。

1-2. 迷惑行為と認知される基準

「相手が迷惑だとは思っておらず知らずに迷惑行為を生起する者」は自分の行動が迷惑に思われているとは気が付いていないため、行為者側に直接働きかける行為者側のアプローチは困難であると考えられる。そのため、受け手がどのような事を迷惑に思うのか、その判断基準や要因を検討し示すことによって、これらの「相手に迷惑だと思っていないために引き起こされる迷惑行為」は対応できるものとなる。以上のことから「相手に迷惑だと思っていないために引き起こされる迷惑行為」という行為を検討するにあたっては、認知者側のアプローチが重要であると考えられる。

これまでの認知者側のアプローチ研究によると、吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斉藤・森・石田・北折（1999）では、迷惑行為の判断基準が曖昧であることを示唆している。吉田ら（1999）は、日常の迷惑行為を持ち寄り、その行為の検討を行った上で、120 個の迷惑行為リストを作成した。さらに、調査対象者に「このような振る舞いを目にしたとき、あなたはどの程度『迷惑だ』と感じるでしょうか」と教示し 5 段階で評定させた。これらを主成分分析にかけた結果、「ルール・マナー違反行為」と「周りの人との調和を乱す行為」という 2 つの主成分が抽出された。しかし、多くの項目はどちらの成分にも高い負荷量を示さなかったため、一般的に人が「迷惑だ」と考えている行為を抽出することはできなかった。これらのことから、迷惑行為であると判断される基準は曖昧であり、受け手の価値観や判断によって異なることが改めて示されたと言える。迷惑行為の判断基準やその要因に注目し検討していくことは、迷惑行為研究に有益であると言える。また、吉田ら（1999）の研究では、日常的な迷惑行為を収集したが「日常的な迷惑行為」も「社会的迷惑行為」と同様に概念として広いものであることが考えられる。このことから、迷惑行為の研究を進めるにあたって、扱う迷惑行為の生起場面や関係性、要因などを絞り込む必要がある。

よって、本研究では受け手の個人特性が迷惑行為の判断基準やその要因に関連があるのかを示すことを目的とし、迷惑行為が生起しやすい場面を設定して調査を行う。

2. ありがた迷惑行為

2-1. ありがた迷惑行為について

「相手にとって迷惑だとは思っておらず引き起こされる迷惑行為」の行為として「ありがた迷惑行為」が考えられる。ありがた迷惑とは、辞書によると「人の親切や行為が、それを受ける人にとっては、かえって迷惑となること。また、そのさま。」とあり、行為者は受け手にとって好意だと考えて行動したものが、受け手にとっては迷惑と認知されてしまう行為である。

このような特徴を持つと考えられるありがた迷惑行為を説明するためには、迷惑行為という視点からだけでなく、援助行動の概念からも説明する必要がある。本来の援助行動とは、相手のためになるように行動することであるが、その援助を受ける際に被援助者は否定的な態度を示すことがあると言う。松浦（2007）によると、援助を行う際に、その援助が本当に被援助者の希望や期待をどれだけ正確に読み取っているのか、援助者の判断によって被援助者の望むような援助を行えるかどうかを考えることが必要であると示唆し、被援助者の立場より検討することの重要性を述べている。援助でありながらも被援助者にとっては否定感情が生起する不適切な援助行動は、ありがた迷惑行為と近い概念であることが考えられる。

援助行動の先行研究では、被援助者側に立って物事を見ることが適切な援助行動を行う鍵であるとされ、従来、援助者の立場から検討されるものが多かった。しかし、近年、被援助者側の研究も盛んに行われるようになり、その中でも、被援助者の否定的な感情について検討を行った西川（1998）によると、否定的な感情が生起する要因として、援助を受けたことによる被援助者の自尊心の脅威、被援助者が援助者と自分の間に感じる衡平関係の崩壊、援助を受けたことで生じる返報の義務の遂行を負担に想う心理的負債などと説明している。これらのことから、援助行動の観点においても、行為者が相手のために想った行動であったとしても受け手が肯定的な評価を下すわけではなく、その好意に対して困惑する場合もあることが示唆されている。

以上のことから、本研究ではありがた迷惑行為を「行為者が相手のために思って行動したにも関わらず、相手の不快感を生起させる行為」と定義する。ありがた迷惑行為とこれまでの迷惑行為の違いは、受け手が行為者の好意を認識しているところであり、受け手はその行為に対して不満や困惑を抱いているというネガティブとポジティブな感情が混在している状態であることが考えられる。

2-2. ありがた迷惑行為の不快感

ありがた迷惑行為はポジティブな感情、ネガティブな感情が混在した状態であり、先行研究のような迷惑行為とは異なった不快感であることが考えられる。援助行動の場面における不快感の場合、生起する不快な感情としては、心理的負債、恩義、援助を受けての申し訳なさ、罪悪感、自尊心の脅威と低下、援助者に対する不満感、恥ずかしさ、惨めさなどが考えられ、これらの不快感は迷惑行為の観点から、以下のように整理することができる。

心理的負債、恩義、援助を受けての申し訳なさ、罪悪感などは互惠性の観点から説明できる不快感である。互惠性とは、この場合、援助を受けることで行為者に対して、その分行為者に返報をしなければならないというものである。このような行為は、相手との今後の関係性を維持するため、こちらもお返しをしなければならない、貸しをつくった状態でありたくないというような一種の強迫観念のようなものであることが考えられる。受け手は、このような行為の好意事態には不快感を抱いておらず、比較的迷惑度の低いものであることが予想される。

次に自尊心の脅威と低下、援助者に対する不満感、恥ずかしさ、惨めさなどの感情は自尊心の低下からくる不快感であることが考えられる。被援助者の検討を行った Nadler & Fisher (1986) は自尊心脅威モデルでこの状態を説明している。この自尊心の低下は、他者から援助を受けることは自力で問題解決ができないという認識を自分にもたらし、自分や援助者に対し否定的な評価をするというものである。これは上記で述べたものと違い、自尊心の低下が引き起こされるのを維持するため、その好意を認知していたとしても反発することが考えられ、迷惑度の高くなると予想される。

ありがた迷惑行為は「相手の好意を認知し、その行動が不快感を生起させる」というものである。心理的負債や恩義などを感じる行為は、好意や行動に不快を感じているわけではなく、その後「返報しなければならない」という義務によるものである。このことから、自尊心の低下によって生起する不快感は、受け手の立場を知らずに脅かすものであり、その行為に対して不快感を露わにしていると考えられる。以上のことから、定義より、本研究におけるありがた迷惑行為の不快感は、自尊心の脅威と低下、援助者に対する不満感、恥ずかしさ、惨めさなどの不快感であると予想される。

また、これまでの迷惑行為研究において「迷惑度」という迷惑の度合いを直接尋ねる質問紙が多く、迷惑度が高いものは不快感情が生起していると考えられるものが多かった。しか

し、ありがた迷惑行為においては、好意を認知していることが前提となっているため、これまでの迷惑度とは違う指標が必要であると考えられる。そこで、本研究ではありがた迷惑行為で生起する不快感をストレスの観点から測定を試みる。

心理学におけるストレス過程の研究として Lazarus & Folkman (1984) は先行条件→認知的評価→コーピング→精神的健康という、ストレス過程の一連の流れを想定している。外部から何かしら刺激を受け、その刺激が自身に脅威であると認知し、苛立ちや不安などの心理的または身体的なストレス反応として表出するのである。つまり、何かしらのイベントに遭遇した際、人はそのイベントが健康的なものか、ストレスフルなものか、ストレスフルであるならどのようなコーピングが選択可能かという認知的評価がなされる。その認知的評価に基づいてコーピングが行われ、そのイベントが個人の精神的健康に及ぼす影響を生じさせるという流れである。ストレスな状態とは認知的評価に基づいてどのようなコーピングを選択するのかによって、ストレス反応の高さが変化し精神的健康に影響を及ぼすということである。この認知的評価とは Lazarus & Folkman (1984) によると、ある出来事が個人にとって、どの程度、脅威的であるかというストレスラーの脅威性あるいは影響性などに関する評価と、個人がある出来事に対して対処可能なものであるかどうか、というストレスラーに対するコントロール可能性に関する評価に分類される。この認知的評価を行う際に、ありがた迷惑行為というイベントが生起した際、迷惑行為であるにも関わらず行為者の好意が関係しているため「自身の意思決定や行動の自由を奪う好意、自分を想っての好意」という一種の不協和が生じている可能性がある。その際、受け手はコントロール可能性を低く認知するため、ストレス反応が表出しているのではないだろうか。そして、その対処行動として自身の自由を回復しようとするための反発などが生起していると考えられる。

よって本研究では、認知的評価の際に不協和が生じ、それによってストレス反応が表出されていると考えられる。このことから、このストレス反応をありがた迷惑行為で生起する不快感であると仮定し、ストレス尺度の心理的ストレス反応の項目を用いて検討を行う。

2-3. ありがた迷惑行為の受け手

ありがた迷惑行為の受け手は、行為者の好意を認知しているにも関わらず不快感が生起する要因として、次のような場面を考えることができる。

1 つめに考えられる場面として、その好意によって却って受け手の事態が悪化してしま

う事が挙げられる。これは好意を受けたことによって、問題解決が困難、深刻化してしまう場合やそういう可能性のある場面である。これは、受け手が問題解決を試みた際、受け手なりのやり方や法則があり、それにしたがって行動しようとした際、行為者による援助が受け手にとっては介入されたと感じる場合もある。それに対する不満や怒りなどのネガティブな感情が生起することが考えられる。

2 つめの場面として、ありがた迷惑行為の不快感においても説明した、好意によって問題は解決したが受け手の自尊心など傷つけてしまう場面である。行為者の好意を受けることによって、受け手が問題解決できなかったと自覚し、羞恥心や自尊心の低下といった状態から悲しみや不満などのネガティブな感情が生起していることが考えられる。

このことから、ありがた迷惑行為の受け手は、その好意によって受け手の立場を脅かされるため、自身の立場を維持しようと反発していることが考えられる。ありがた迷惑行為の受け手は「好意を受けるだけ」という立場ではなく、受け手なりの意思決定欲や自尊心などがあり主体性を持っていると考えることができる。

以上のことから、ありがた迷惑行為の受け手は、迷惑行為における迷惑を受け不満を募らせる受け手や、援助行動の援助者と被援助者のように援助を受けるだけの立場とは異なり、主体性を持った受け手であることが考えられる。

3. ありがた迷惑行為の受け手の特性—心理的リアクタンス理論—

ありがた迷惑行為の受け手は、これまでの先行研究で取り扱われてきた受け手とは異なり、確かな主体性を持っていることが考えられる。このように主体性を維持するために、好意に対する反発や抵抗を生起しやすい特性を持っていることが予想される。

この受け手の特性として、説得への抵抗理論における心理的リアクタンス理論によって説明できる。説得の抵抗とは、日常場面において相手に説得を持ちかけた際、説得は常に成功するとは限らず、説得が功を奏さず相手が全く動かない場合や、説得方向とは逆方向に態度を変えることも少なくない。このような説得の抵抗を説明する理論として取り上げられているのが、心理的リアクタンス理論である。心理的リアクタンス理論は、リアクタンスという自由回復を目指すという観点から説明される理論である。リアクタンスとは「失われた自由を回復しようとする、または失われそうな自由を確保しようとする動機づけの状態（今城, 1996）」であり、ここで言う自由とは「ある態度や行動を自分がとりうるとい

う信念」である。このリアクタンス理論の観点から、ありがた迷惑行為の受け手も、自身の立場や主体性を制限されることを脅威に感じ、自由を回復しようとして反発していることが考えられる。以上のことから、ありがた迷惑行為で生起する好意への不快感は、受け手のリアクタンス喚起によってもたらされていることが考えられる。

このリアクタンスの反応として、高木ら（2005）によると「自由の行使」、「相手への好意度の減少」、「自己支配感などの増大」などの主観的な反応も生じるとされている。リアクタンスの生起によって、自分ができることを他者に勝手にされることによって「自分で自由に決める」という自由を侵害され反発し、好意度も減少することによって迷惑度が高くなっていると考えられる。

また、不適切な援助行動研究 (Fisher, Nadler, & Whitcher-Alagna, 1983) において、この心理的リアクタンス理論を用いた説明がされている。しかし、ここで用いられた説明は援助の受け手側の反応を直接扱ったものではなく、また一定の条件が整わないと適用できない場合や諸研究の結果と矛盾が生じていることが指摘されており、理論として説明するには不十分であることが考えられる。また、不適切な援助では、何かしら援助を受けることで相手へと返さなければならないという互惠性の観点から、リアクタンスが喚起され、自由回復行動を取ろうとすることから抵抗が生まれると説明されている。これらは、あくまで援助者側の視点から説明されるものであり、本研究の受け手の主体性によって説明される理論とは異なる見解である。

本研究において、受け手の主体性という観点よりリアクタンス理論によって説明することで、迷惑行為研究だけでなく不適切な援助行動研究において新たな知見を提示することができるだろう。

また、上記でも述べたように、好意に対して反発が生起する場面としては、「好意を受けたことによって、受け手の事態が悪化してしまう場面」と「好意を受けたことによって受け手の自尊心など傷つけてしまう場面」の2つであると考えられる。この1つめの場面と2つめの場面は、どちらも受け手の主体性を脅かすため、リアクタンスが喚起され、自由を回復しようとすることが考えられるが、1つめの場面と2つめの場面では、喚起されるリアクタンスによる反発に違いがあることが予想される。1つめの場面は、好意を受けることによって受け手に何らかの損害をもたらさせる可能性があるため、行為者に対し感情的に抵抗することや自由を回復しようとすることが考えられる。2つめの場面は、好意によって受け手の自尊心が低下する可能性があるため、自身の立場を維持しようとする反発

が見られると考えられる。

以上のことから、2つの場面によって、喚起されるリアクタンス反応に違いが見られるのではないかと考えられる。

4. ありがた迷惑行為の関係性

4-1. 親密性

ありがた迷惑行為はこれまでの迷惑行為の生起場面とは異なる可能性があるため、慎重に検討することが求められる。ありがた迷惑行為の行為者は「相手のために想って行動する」ということから、援助行動の生起しやすい関係性に当てはめて考えることができる。高木（1982）によると援助行動が生起しやすい関係には「被援助者と援助者の近い関係」示唆し、また相川（1995）でも、援助者と被援助者の関係性が親しいのか顔見知りなのかについて言及しており、ありがた迷惑行為が生起するためには、行為者と受け手の関係性には親密性が重要であると考えることができる。

また、関係のない他者によるありがた迷惑行為も考えられるが、本研究では親しい間柄で生起するありがた迷惑行為において焦点を当てるものとする。小池・吉田（2005）による迷惑認知の研究において、迷惑行為者が親しい友人の場合と顔見知りの知人の場合と設定した際、顔見知りの知人による迷惑行為の方が「迷惑である」と認知される結果が示唆されている。このように、全く知らない他者によるありがた迷惑行為は、ただの迷惑行為として捉えられる可能性があるため、今回の調査では、親密な関係で生起するありがた迷惑行為を検討していくものとする。

4-2. 親子関係

ありがた迷惑行為が生起しやすい関係性においては、親密性だけでなく受け手の立場というものも考慮すべき点である。援助行動の概念から説明すると、成人の場合、実際の生活の中で人から援助を受ける機会はそれほど多くないことが考えられる。成人の場合、返報能力は高く、返報にも多様な方法を用いることができ、援助を受けることに否定的な感情を抱く人は「援助を受けない」ことを選択することもできる。以上のことから、成人し独立している者においては、ありがた迷惑行為の生起場面を想定することが困難であることが考えられる。そこで、日常生活で援助を必要とし、返報を十分に行うことができない

子ども、その子どもに援助を行う親の関係に注目した。子どもと言っても全ての子どもがありがた迷惑行為を認知しているとは限らない。泉井（2009）は、被援助時の不快感情の発達を検討している。幼児や児童期初期の子どもにおいて、大人であれば抱く不快感情を抱かないことが示された。これは、幼児や児童期初期の子どもたちが日常生活の中で自分の能力を高く見積もり、今できないことや失敗は努力により挽回できると考えることや、自分の望む自己が本当の自分自身であると捉えてしまう **wishful thinking**（Schneider, 1998）などの楽観性のひとつであることが考えられる。

そこで、本研究では青年期の子どもと親の関係について着目した。感謝の生起における感情について検討を行った池田（2006）は、青年期における母親に対する感謝には、援助してくれることの嬉しさ、ありがたさといった肯定的感情だけでなく、負担をかけてすまないと感じる自責的な感情が含まれていることを明らかにしている。青年期は、親からの自立を模索し、親子関係が大きく変化する時期であり、そのためポジティブだけでなくネガティブな感情が混在しているアンビバレントな状態であることが考えられる。

以上のことから、青年期における親子関係には、ありがた迷惑行為を想定しやすく、ポジティブな感情とネガティブな感情が混在するアンビバレントな状態であるため、ありがた迷惑行為の認知をしやすくなることが予想される。また、青年期の子どもは進路や私生活を送る上で親から徐々に自立しようとする時期である。そのため、親から援助されることによって自尊心の低下などによる不快感が生じやすいと考えられる。

また、親子関係に注目した際に、本研究では性差についても考慮したい。西平・久世（1988）は青年期における親子の関係は性別によって違いがあることが示唆しており、青年期の心理的離乳プロセスにおいて男女差が見られた。その違いは男性より女性の方が「親への甘え」が強く、女性よりも男性の方が「親から仲間への離脱」が強い結果であった。また、青年期の女性と母親との関係が継続して良好である（山岸，2000）という指摘もされている。

以上のことから、男性は親からのありがた迷惑行為を干渉と思い疎ましく感じ、女性は親への甘えが考えられることから、ありがた迷惑行為とは思わずこの好意を素直に受けていることが考えられる。そのため、女性は男性に比べて不快感はそれほど生じないことが予想される。

5. ありがた迷惑行為の研究的意義

ありがた迷惑行為を研究することは、これまでの迷惑行為研究に重要だった「迷惑である」と判断する特性を新たに示し、不適切な援助行動に関しては受け手の主体性という知見を示すことができるため、どちらにも研究においても有益であると言える。

また、上記でも述べた1つめの場面では、受け手の意思や意見を聞かないことによる不快感の生起であり、2つめの場面は受け手の自尊心や立場など脅かすことによって生起する不快感である。このことから、ありがた迷惑行為において、受け手の主体性の脅かされ方によって不快感が異なることが考えられる。これまでの迷惑行為研究では、迷惑の度合いを尋ねるものが多いが、どのような理由によって不快感が生起し、さらにどのような不快感が生起しているのかなどの質について検討したものはない。そのため、不快感の質に検討することは、迷惑行為を調査する上で重要な検討となるであろう。

また、ありがた迷惑行為は日本文化的なものであることが考えられる。ありがた迷惑行為は感謝と不満、困惑が混在している状態である。一言ら（2008）によると、日本人は被援助に伴う感情に「助けられて嬉しい、感謝している」と感じると同時に「すまない、恥ずかしい、悲しい、後悔している」とも感じているのだと言う。このようにポジティブな感情とネガティブな感情が混在するのは日本的であると示唆している。このような感情状態になる背景には、援助者への配慮や「関係懸念」が関係しており、日本人は感謝や好意に肯定的感情を抱きつつも、同時にネガティブな感情を抱きやすいと考えられる。また、高井（2012）によると日本のコミュニケーションは他者志向的で協調的であるため、相手との関係性を重視する日本人にとって、ありがた迷惑行為が行われたとしても、その不満や困惑を行為者に告げないことが考えられる。このような特徴から、ありがた迷惑を指摘されることはなく、他の迷惑行為のように対応や規制によってなくなることはないのである。このことから、相手との関係性を懸念する日本人にとって、ありがた迷惑行為を検討することは文化的にも意義があると言える。

以上のことから、「ありがた迷惑行為」を受け手の判断基準やその要因を検討することは、研究的に意義のある事である。

6. 本研究の目的

本研究の目的として、ありがた迷惑行為を通して、人が「なぜ、どうして迷惑だと判断するのか、不快であると感じるのか」などの判断基準やその要因を、受け手の主体性や特性という観点から調査し検討する。

予備調査において、ありがた迷惑行為にはどのような行為があるのか、生起する場面や関係性にもどのようなものがあるのかを調査し検討する。

本調査では、予備調査から得た結果をもとに、ありがた迷惑行為を「迷惑だ」と判断する要因を受け手の特性から検討していくものとする。

第2章 予備調査：ありがた迷惑行為の調査

1. 予備調査の目的

ありがた迷惑行為を取り扱うに当たって、ありがた迷惑行為にはどのような行為が該当するのかを調査する。ありがた迷惑行為にはどのような特徴が見られるのか、またどのような場面で生起しているのかを検討することによって、受け手が何をもって「迷惑である」と判断しているのかの要因を探ることが目的である。

2. 方法

I. 調査対象者

国立 M 大学の大学生 1～3 年生を対象とし、学生 26 名（男性 6 名、女性 18 名、不明 2 名）を対象に質問紙調査を行った。「ありがた迷惑行為等を受けたことがない」と回答した者 2 名、ありがた迷惑行為の具体的記述なしの者 1 名を除き、23 名を分析対象とした。分析対象者の学年の内訳は、1 年生 10 名、2 年生 7 名、3 年生 5 名、不明 1 名であった。

II. 調査時期

2012 年 12 月下旬

III. 手続き

国立 M 大学における講義において、質問紙を一斉に配布し、講義後に回収できるものは回収した。また、その場で書くことができなかった数名に対しては後日回収した。

IV. 調査内容

調査内容として、ありがた迷惑行為を受けたことがあるのかの有無を尋ねた。また、ありがた迷惑行為を受けたことがあると回答した者には、体験したことがあるありがた迷惑行為を具体的に記述（複数記述可）させた。さらに、ありがた迷惑行為は本当に迷惑だと感じているのかどうかを検討するため、その行為に対してどのくらい迷惑だと感じたのか、迷惑と感じる度合い（1. 迷惑だと感じなかった～4. かなり迷惑だと思った）を 4 件法で回答させた。

3. 結果

3-1. ありがた迷惑行為の分類

ありがた迷惑行為にはどのようなものがあるのかを調査するため、対象者に今まで受けたことのある「ありがた迷惑行為」を記述させた。そこで記述された 25 行為を心理学研究室に在籍する学生と教員（1 名）と KJ 法を行った（記述された 25 行為は参考資料ページを参照）。「ありがた迷惑行為」を項目ごとにまとめた結果 4 つのカテゴリーに分類され、また、カテゴリーごとに迷惑だと感じている度合いの平均値を算出した（Table1）。

Table1 ありがた迷惑行為における 4 つのカテゴリーと迷惑の度合い

	項目数	迷惑と感じる度合い
1 他者勝手	13	2.92
2 過剰心配	7	2.86
3 集団尊重	2	2
4 大量物資	3	1.67

カテゴリーを命名する際に「頼んでいないのに勝手にされる」、「自分でできることを誰かにされる」という項目を多く占めたカテゴリー1 は「他者勝手行為」と命名した。他者勝手に分類されたありがた迷惑行為の数は最も多く、迷惑と感じる度合いも全カテゴリー内で最も高かった。

カテゴリー2 では「1 人で帰ることができるのにすごく心配される」、「大丈夫なのに。心配のメールが頻繁にある」などの過剰に心配される行為が多かった。そこでカテゴリー2 は「過剰心配行為」と命名した。迷惑と感じる度合いは、全カテゴリー中 2 番目に高かった。

カテゴリー3 は、集団で行動する際に個人の利益や自由よりも集団で動くことを尊重されるという内容のもので占められていたため「集団尊重行為」と命名された。迷惑と感じる度合いは 3 番目に高い結果となった。

カテゴリー4 は、知り合いや身内から大量に物を貰ってしまい対応に困るという内容ばかりであったため、「大量物資行為」と命名した。迷惑だと感じる度合いは一番低い結果となった。

第3章 予備調査：考察

1. ありがた迷惑行為4つのカテゴリー

ありがた迷惑行為を受けた際に4つのカテゴリーに分類されたが、その中でも、自分にできることを相手にされる「他者勝手行為」と、過剰に心配をされて困惑する「過剰心配行為」の迷惑度が高いことが示された。その他の「集団尊重行為」や「大量物資行為」は、迷惑度が低いことが示された。「集団尊重行為」の迷惑度が低いのは、日本人は集団行動を重視、他者志向的な考え方から、個人の自由や利益よりも集団を重んじる傾向にあるため、迷惑度はあまり高くないことが考えられる。「大量物資行為」においては、受け手に大きな損害を与えるものを貰うというよりは、その物への対応や対処に困惑するという内容が見受けられたことから、援助行動における否定的な感情である心理的負債、援助を受けたことによる申し訳なさなどが関係していることが考えられる。大量に物をもらうことには、ありがたさを感じているが、相手に「返報しなければならない」という貸しの状態を懸念したことによる困惑であるため、その好意事態には反発は生起せず、迷惑度が低かったものと考えられる。

迷惑度の高かった「他者勝手行為」と「過剰心配行為」にあたる行動は、行為者が受け手ためによかれと思って行った行動であるにも関わらず迷惑度が高い。この2つのカテゴリーにあたる行為は、問題と目的で述べたように、行為者の好意が受け手の立場を脅威にさらし、自身の主体性を維持しようとする反発が生まれたために、迷惑度が高くなったと考えることができる。

以上のことから、ありがた迷惑行為の中でも、受け手の反発によって不快感が生起していると考えられる「他者勝手行為」と「過剰心配行為」というカテゴリーに焦点を当て、本調査で検討していくこととする。

2. ありがた迷惑行為における迷惑度と満足度

予備調査より、「他者勝手行為」と「過剰心配行為」にあたる行為は迷惑度が高かった。しかしながら、予備調査によって収集されたありがた迷惑行為の記述（記述されたありがた迷惑行為の詳細は付属資料 1 を参照）を見ると、「他者勝手行為」にあたる行為に対しては迷惑度が高いだけなのに対し、「過剰心配行為」にあたるものには「自分のためなのはわかる」、「ありがたいけど困る」と言ったような不平不満ではなく、困惑している、といったような表現が読み取れた。これらは、他者に勝手にされることで困難な事態になったことによって生起する不快感と、過剰に心配されることで自身の自尊心などの低下からくる不快感という質の違いが示されたと言える。これにより、不快感の質は受け手の主体性の維持による反発の場面によって異なることが示されたと言える。

予備調査においても迷惑度について「どのくらい迷惑か」を 4 件法で回答させているため、どのような不快感を生起して迷惑だと思ったのかの検討はなされていない。よって本調査では「他者勝手行為」と「過剰心配行為」における不快感の詳細を検討することとする。また、ありがた迷惑行為を収集する際に、ただの不平不満や不快感を記述しているものもあった。しかし、ありがた迷惑行為は、行為者の好意を認知していることが前提であるため、ありがた迷惑行為について調査する際には、その行為に対する感謝や満足などの「ありがたさ」の認知についても回答させていく必要があるだろう。

3. 行為者と受け手の関係性

予備調査では、調査対象者に体験したことのあるありがた迷惑行為を記述させたが、どのような環境であるのか、行為者との関係などの詳細に書かれたものは少なかった。しかしながら、「他者勝手行為」と「過剰心配行為」にあたる行為は、親、バイト先での先輩、友人間などで生起するという記述が読み取れた。全く知らない人間によるありがた迷惑行為の記述が少なかったのは、受け手と行為者の関係性が場限りの一過性のものであり記憶に残らなかったのではないかと考えられる。

また、親密でない関係において生起するありがた迷惑行為の記述は、迷惑度が高いことが見受けられた。これは、ある程度の親密性がありがた迷惑行為か、ただの迷惑行為かを区別する要因になっていると考えられる。小池・吉田（2007）によると、行為者との関係性と迷惑認知を検討した結果、親しくない友人は親しい友人に比べ迷惑度が高いことが示

唆されている。

以上のことから、ありがた迷惑行為に焦点を当てて研究には、その行為者と受け手の関係性は親密なものである必要がありことが示された。迷惑行為とありがた迷惑行為を区別し回答させる際には、行為者と受け手は親しい関係かつ力関係のある設定が望ましいだろう。

4. 受け手の特性

収集されたありがた迷惑行為に中でも「他者勝手行為」と「過剰心配行為」にあたる行為は迷惑度が高いことが示された。また、記述の内容として、自身が自由にできない事に対する不満や、干渉され過ぎることに対する反発的な内容が示され、受け手の主体性による反発が影響していることが示唆された。これは、心理的リアクタンス理論が考えられる。

このような、リアクタンスの生起によって、「他者勝手行為」では、自分ができるところを他者に勝手にされることによって「自分で自由に決める」という自由を侵害され反発し、好意度も減少することによって迷惑度が高くなっていると考えられる。また「過剰心配行為」では、過剰に心配されることによって自身を心配してくれるという好意を認知しやすいが、自身に強く干渉され、自尊心なども低下するために不快感が生じたと考えられる。そのため、過剰心配行為における記述では「自分のためなのはわかる」、「ありがたいけど困る」といったような不平不満だけの記述が少なかったと考えられる。

5. ありがた迷惑行為の場面設定

ありがた迷惑行為に中でも「他者勝手行為」と「過剰心配行為」の迷惑度が高いことが示されたため、この2つのカテゴリーを想定した場面を設定する必要がある。

今回、不快感の指標としてストレス尺度を用いるため、ストレスナーな事象を選定することが重要であると言える。ありがた迷惑行為で「迷惑度の高いもの」を抽出しているため、問題ないストレスの先行研究においては、真船・鈴木・大塚（2006）は、大学生におけるストレスナーの特徴を調査しており、大学生の負担な出来事を自由記述により収集した。自由記述によって収集された自称は29種類のキーワードが抽出された。その内容は、レポートやゼミ・授業、進路・就職といった大学生活関連、大学以外のアルバイトや家族

まで多岐にわたっている。これらのキーワードは「アルバイト・サークル」、「人間関係」、「学業」、「進路・就職」、「損害」、「その他」の6群に分けられ、この場面にあたる行為がリアクタンスの特性によってはストレスナーな事象であることが考えられる。これらのストレスナーの特徴を考慮しながら場面を想定することが重要であると考えられる。

本研究では、親子間で生起するありがた迷惑行為に着目しているため、親子間で生起する場面の手がかりとして「進路・就職」と「人間関係」をもとに場面を想定する。青年期における学生は、親から自立し始める時期であり、親への依存から友人関係への依存へ徐々に移行していく時期である。そのため「進路・就職」というものは自身の将来を決めるため、親からのアドバイスや好意に対して自身で決めたいというリアクタンスが生起することが考えられる。また、「人間関係」では友人との付き合いを優先したい時期であるため、親からの好意を干渉ととらえ反発するリアクタンスが生起していることが考えられる。

よって、本調査における想定場面では「進路・選択」、「人間関係」のストレスナーを考慮し場面を想定することとする。

第4章 本調査：ありがた迷惑行為の不快感と満足度、リアクタンس特性の関連

1. 目的

予備調査より、本調査ではありがた迷惑行為の「他者勝手行為」、「過剰心配行為」について取り扱うものとする。この2つのカテゴリーは迷惑度の高さは、受け手の特性によって影響している可能性がある。その特性として、リアクタンس特性が考えられる。リアクタンスとは「失われた自由を回復しようとする、または失われそうな自由を確保しようとする動機づけの状態（深田, 1996）」というものである。他者に何かをされる、干渉されることによって反発を生み、それが不快な感情にも影響していると考えられる。

予備調査の考察でも述べたように、他者勝手行為では自由を取り戻そうとする反発、過剰心配では干渉に対する抵抗というようにリアクタンス特性の質が異なることが予想される。本研究では、リアクタンス特性の高さだけでなく、リアクタンス特性の質の違いについても検討する。さらに、不快感についての質も検討していくこととする。これまでの迷惑行為研究では、迷惑かどうかの度合いを尋ねるものばかりで、どのような不快感から迷惑だと判断しているのかを検討した研究はない。そこで、本研究では、不快感にはどのような違いがあるのかをありがた迷惑行為に焦点を当てて検討する。

また、本研究では、親子間で生起するありがた迷惑行為について着目する。ありがた迷惑行為は、友人間、職場の上司部下、嫁姑間などの様々な関係性で生起することが予想される。ありがた迷惑行為に焦点を当てる際、受け手と行為者にはある程度の親密さが求められ、受け手側を想って行動する行為者が必要である。そこで、本研究では親子間に場面を設定することとした。親と子の関係は継続するものであり一過性の親密さではないことや、子どものために想って心配し行動するため、受け手である子どももその好意を認知しやすいと考えられる。

以上のことから、本調査では、ありがた迷惑行為の「他者勝手行為」、「過剰心配行為」に焦点を当て、行為者と受け手の関係性には親子関係に設定し、不快感の質の違いがリアクタンス特性とどう関連しているのかを検討することを目的とする。

2. 仮説

ありがた迷惑行為の「他者勝手行為」、「過剰心配行為」にはリアクタンス特性が関係していることが予想される。また、予備調査よりリアクタンス特性の質にも違いが見られそうなことから、リアクタンス特性尺度を用いてリアクタンスの質の違いを明らかにする。リアクタンス特性尺度（尺度の詳細については、方法の使用尺度参照）の4つの下位尺度の内容は、行為者に対し内心感情的に反発する「感情的反発」、自由の回復や制約を解こうと行動する「直接的な自由回復の行使」、自身で決定しようとする「意思決定の自由」、干渉されることを脅威と感じる「脅威の感受性」である。他者勝手行為では、自由に行える権利を回復しようすることや、相手に強い反発を示すことが予想されるため、リアクタンス特性の中でも「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」による影響が見られるだろう。過剰心配行為では、心配されることによって干渉されていると感じやすくなり、自分自身の行動は自身で決めたいと感じやすくなることが予想されるため、リアクタンス特性の中でも「意思決定の自由」や「脅威の感受性」による影響が見られるだろう。また、予備調査より「他者勝手行為」では不平不満が多く、「過剰心配行為」では困惑した内容が読み取れることから、その行為によって生起する不快感の質は異なるだろう。同様に、ありがた迷惑行為における「ありがたさ」の得点も異なるだろう。本調査では、青年期の親子関係を想定した場面を用いるが、青年期における親子関係は性別によって差がみられることが考えられるため、性別による検討も行う。男性は親から分離・独立して自立していくことが考えられるため、ありがた迷惑行為における不快感は高いと予想される。女性は親への甘え見られることから、ありがた迷惑行為にはそれほど不快感を示さないことが予想される。以上のことから、本調査の仮説をまとめると以下の通りである。

仮説 1 感情的な反発や自由を直接的に回復しようとするなどのリアクタンスの生起によって好意を他者勝手行為と認知しやすいだろう。

仮説 2 意思決定の自由や干渉への反発などのリアクタンスが生起することによって好意を過剰心配行為であると認知しやすいだろう。

仮説 3 他者勝手行為は怒りなどの不快感、過剰心配行為は不安や困惑などの不快感が生起し、不快感の質が異なるだろう。

仮説 4 男性においては他者勝手行為、過剰心配行為どちらも不快感が高くなるだろう。女性においては親への甘えが考えられることから不快感は低いだろう。

3. 方法

I. 調査対象者

国立 M 大学所属の学生 78 名と私立 M 大学所属の学生 148 を対象とし、226 名に質問紙調査を行った。回答に不備のあった 19 名を除き、207 名（男性 99 名、女性 106 名、不明 2 名）を分析対象とした。学年の内訳は、1 年生 92 名、2 年生 41 名、3 年生 39 名、4 年生 24 名、大学院生 1 年生 5 名、大学院 2 年生 1 名、不明 5 名であった。

II. 調査時期

2012 年 12 月上旬～2013 年 1 月上旬

III. 手続き

国立 M 大学の 78 名は筆者が無作為に選んだ学生に対し実施し質問紙を回答させた。私立 M 大学へは質問紙調査を依頼し実施した。私立 M 大学 148 名は、心理学関連科目の講義にて質問紙を一斉配布、一斉回収方式で行った。また、質問紙 A は他者勝手行為場面、過剰心配行為場面の順序で提示され、質問紙 B は過剰心配行為場面、他者勝手行為場面の順序で提示される構成となっており、カウンターバランスを考慮したものを配布している。

IV. 使用尺度

・リアクタンス特性総合尺度(23 項目)

高木・吉見・深田(2005)のリアクタンス特性を計測する尺度を使用した。この尺度はこれまでの先行研究にあったリアクタンス特性尺度の内容を包括的したものであり、他のリアクタンス特性尺度の効果の比較を行った研究（高木・吉見・深田，2005）においても因子の解釈のしやすさや、その効果の出現率の高さから判断して、この尺度を使用することとした。

この総合尺度の下位尺度は、他者からの自由制約に対する自由回復を目指す「直接的な自由回復の行使」、自分の自由への干渉に対する感情的反発や抵抗などの「意思決定の自由」、他者からの影響に内的な反発を示す「感情的反発」、他者の干渉や規則に対する認知に関する項目の「驚異の感受性」で構成されており、本研究の内容にも適していると判断し、使用した。

教示文は「あなた自身についてお聞きします。当てはまるものを選び回答して下さい。」というものであった。項目の回答形式は「1 当てはまらない」から「5 当てはまる」の5件法で回答させた。

・大学生用ストレス自己評価尺度(23項目)

ありがた迷惑行為の不快感を測定するためのひとつの指標としてストレスが考えられる。これまでの先行研究にあった迷惑度とは、不快感情の生起において迷惑かどうかを判断しているため、どのような不快感なのかの検討はなされていない。不快感の質を検討するため、大学生用ストレス自己評価尺度（尾関，1990）を使用した。

設定した場面の行為に対し、どのようなストレス感じているのかを検討するためである。尾関（1990）が作成した尺度のうち、ストレス反応尺度構成項目の情動的反応（①抑うつ気分、②怒り、③不安）などの15項目、認知・行動的反応（①情緒的混乱）の8項目を選出した。本来の尾関（1999）の尺度では、身体的ストレスに関する項目も含まれているが、今回はありがた迷惑行為の不快感の質を検討のため、身体的ストレスに関する項目は除外することとした。

教示としては「あなたは上記で設定した場面に遭遇した際、あなたはどのような印象をいただくのか」というものであり、項目の回答形式は「1 当てはまらない」から「5 当てはまる」の5件法で回答させた。

・その行為に関する満足度についての項目(12項目)

ありがた迷惑行為は「ありがたい」と感じつつも不快な感情を生起させるものである。そこでありがた迷惑行為を受けた際、その行為に対してどの程度満足しているのか、感謝しているのかを測定するために満足度という項目を設置した。この満足度の項目は、心理学研究室に在籍する学生と教員（1名）との検討により、その行為に対して満足しているのか、感謝しているのかを尋ねる項目を作成した。

教示としては「あなたは上記で設定した場面に遭遇した際、あなたはどのような印象をいただくのか」というものであり、項目の回答形式は「1 当てはまらない」から「5 当てはまる」の5件法で回答させた。

- ・設定した場面への遭遇したことがあるかを問う項目(1項目)

設定した場面にどのくらい遭遇したことがあるのかを回答させた。性別や居住形態によって場面によって偏りがあるのかどうかを確認するためこの項目を設置した。項目の回答形式は「1 全くない」から「5 結構ある」の5件法である。

V. 場面設定

質問紙には以下の場面を設定した。場面の設定には、予備調査をもとに心理学研究室に在籍する学生と教員（1名）との検討により、親子関係で比較的生じやすい場面を設定した。

他者勝手行為の場面内容

あなたはそろそろ先の進路を決めなくてははいけません。
就職活動を行うのか、それとも進学するのか、あなたの中ではまだ決まっていません。
ある日、あなたの親は進路について「この先どうするのか？なにをやっていききたいのか？」と質問をしてきました。答えを出さないまましていると、
あなたの親は「それじゃあ、この就職活動サイトに登録しておく」言われ、
そこで会話は終了しました。

過剰心配行為の場面内容

あなたは少し体調を少し崩していましたが、
久々に会う友人に飲み会に誘われ、それに出席することにしました。
親には飲み会があると伝えていましたが、飲み会が始まって2時間後くらいに親から電話がかかってきました。
「もう夜も遅いし、体調も悪いのだから早く帰りなさい。体調は本当に大丈夫なの？」
というように、はやめに帰るよう促されました。

第5章 本調査：結果

1. 尺度の構成

1-1. リアクタンス特性総合尺度

リアクタンス特性尺度 23 項目に対して主因子法による因子分析を行った。先行研究通りの因子数が確認されたが、23 項目中の 3 項目は十分な負荷量を示さなかったため分析から外し、再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。先行研究通りの 4 因子構造を確認し、第 1 因子「感情的反発($\alpha=.806$)」、第 2 因子「直接的な自由回復の行使($\alpha=.797$)」、第 3 因子「意思決定の自由($\alpha=.784$)」、と言うように、第 3 因子までは先行研究同じ因子名とした。第 4 因子は、干渉する、指図されるなどの干渉に対する項目が高い負荷量を示しており、先行研究では「脅威への感受性」という因子名であるが、本研究の第 4 因子は「干渉への認知($\alpha=.690$)」という、項目内容に近い因子名へと変更した。以上の結果から、十分な負荷量を示さなかった 3 項目を除外し、内的整合性の取れた各因子を今後の分析対象とする。リアクタンス特性総合尺度の因子分析結果は以下の Table2 に示す。

Table 2 リアクタンス特性総合尺度の因子分析（主因子法・Promax 回転）

項目内容	I	II	III	IV
自分でもわかっていることを人から注意されると腹が立つ	.844	-.140	-.109	-.134
明白なことを指摘されるとイライラする	.843	-.085	-.210	.047
「あの人を見習え」と言われると腹が立つ	.618	-.090	-.044	.109
「これをやれ」と強制されると「やりたくない」と思う	.530	.179	.044	.123
「これをやれ」「あれはするな」と指図されると反発を感じる	.501	.218	.179	.089
大袈裟に褒められると相手の意図を疑う	.392	-.016	.147	.021
ひとから「するな」と言われたことを敢えて実行する	-.243	.852	.003	.076
人からやれといわれたことは敢えてやらない	-.054	.738	-.084	-.031
何かを禁止されるとかえってやりたくなる	.030	.714	-.068	-.021
助言されても大抵反対のことをする	-.085	.614	.024	.017
人から言われたことを反対したくなる	.210	.562	-.042	-.142
自分の意思で振る舞えたと満足する	-.112	.051	.686	-.035
自分がどう行動したらよいかは、自分で判断できる	-.252	-.205	.666	.056
人に頼らず自分で自由に意思決定することは私にとって非常に重要だ	-.117	-.074	.639	.021
自由に意思決定ができないと腹が立つ	.194	.094	.619	-.069
私がどうするべきかを人から指図されると「それは私の決めることだ」と思う	.217	-.034	.520	.039
私の自由な意思決定を抑えつけようとする人がいたら腹が立つ	.342	.060	.491	-.076
周囲の人は私の行動にしばしば干渉する	-.057	-.078	.021	.815
人から指図されたと感じることが多い	.176	-.050	-.030	.560
規則が厳しすぎると感じる人が多い	.019	.237	-.016	.514
因子間相関				
I	—	.473	.457	.329
II		—	.261	.480
III			—	.208
IV				—

1-2. 大学生用ストレス自己評価尺度(23 項目)

本研究では他者勝手行為、過剰心配行為において不快感の質を検討するために、大学生用ストレス自己評価尺度 23 項目を使用した。因子分析前に項目分析を行ったところ、過剰心配行為における大学生用ストレス自己評価尺度において項目の多くにフロア効果が見られた。そのため、他者勝手行為と過剰心配行為の大学生用ストレス自己評価尺度の合計得点を算出し、項目分析を行ったところ、天井効果、フロア効果どちらも見られなかったため、23 項目を因子分析にかけた。場面ごとに主因子法・Promax 回転を行った結果、固有値 1 以上の基準から両場面とも同じ 3 因子構造が確認された。各場面の因子負荷量の詳細は Table 3、Table 4 に示す。

第 1 因子では、びくびくしている、気持ちが張りつめているなどの情緒的に不安を感じる項目が高い負荷量を示しており、因子名を「情緒不安」と命名した。また他者勝手行為における信頼性は $\alpha=.941$ 、過剰心配行為では $\alpha=.961$ である。

第 2 因子では、イライラする、不愉快な気分だなどの怒りを表す項目が高い負荷量を示していたため、因子名を「怒り」と命名した。また、各場面における信頼性は、他者勝手行為では $\alpha=.933$ 、過剰心配行為では $\alpha=.956$ である。

第 3 因子では、気分が落ち込む、心が暗くなるなどの抑うつを表す項目が高い負荷量を示していたため、因子名「抑うつ」と命名した。また、各場面における信頼性は、他者勝手行為では $\alpha=.927$ 、過剰心配行為では $\alpha=.926$ である。

第 1 因子の項目には、先行研究における情動的反応の不安項目、認知的反応の情緒的混乱項目の両方が混在する形となった。しかし、本研究ではストレスそのものを扱うのではなく、ありがた迷惑行為において生起した不快感の質を調査することが目的であるため、情動的反応・認知的反応と分けて分析していくものとする。

以上の結果から、不快感の質を検討するものとしてストレス尺度 23 項目を分析対象とする。

Table3 他者勝手場面における大学生用ストレス自己評価尺度の
因子分(主因子法・Promax回転)

項目内容	I	II	III
びくびくしている	.936	-.047	-.166
行動に落ち着きがなくなる	.839	-.050	.008
むやみに動き回り、じっとしていられない	.813	-.006	-.052
気持ちが張りつめている	.795	-.033	.005
重苦しい、圧迫を感じる	.793	.047	-.139
やるべき事に手がつけられない	.775	.059	.025
頭の回転が鈍く、考えがまとまらない	.724	-.025	.089
誰かに慰めてほしい、支えてほしいと思う	.690	-.083	.117
話や行動にまとまりがないと思う	.664	-.003	.097
不安を感じる	.625	-.078	.154
恐怖感を抱く	.618	.201	-.106
根気がなくなる	.583	.107	.119
気がかりなことがすぐに頭に浮かぶ	.576	.051	.129
怒りを感じる	-.064	.941	-.013
いらいらする	-.006	.908	-.039
憤まんがつのる	.040	.892	-.020
不機嫌で怒りっぽい	-.056	.847	.080
不愉快な気分だ	.070	.716	-.009
さみしい気持ちだ	-.043	-.070	.984
悲しい気持ちだ	-.065	-.029	.953
気分が落ち込み、沈む	.048	.077	.780
心が暗くなる	.074	.280	.573
泣きたい気分	.276	.093	.511
因子間相関	I	II	III
I	—	.550	.661
II		—	.654
III			—

Table4 過剰心配場面における大学生用ストレス自己評価尺度の
因子分析(主因子法・Promax回転)

項目内容	I	II	III
むやみに動き回り、じっとしていられない	.931	-.048	-.028
根気がなくなる	.922	-.018	-.049
誰かに慰めてほしい、支えてほしいと思う	.875	-.092	-.026
頭の回転が鈍く、考えがまとまらない	.835	-.122	.067
行動に落ち着きがなくなる	.832	.035	-.019
不安を感じる	.825	.078	-.054
気持ちが張りつめている	.823	.111	-.064
やるべき事に手がつけられない	.804	.007	.039
びくびくしている	.795	.118	-.037
話や行動にまとまりがないと思う	.759	-.117	.123
恐怖感を抱く	.696	.151	.014
重苦しい、圧迫を感じる	.672	.175	.025
気がかりなことがすぐに頭に浮かぶ	.564	-.059	.203
憤まんがつのる	-.002	.962	-.033
怒りを感じる	.032	.937	-.029
いらいらする	-.019	.906	.012
不愉快な気分だ	-.029	.868	.035
不機嫌で怒りっぽい	-.006	.769	.137
さみしい気持ちだ	-.047	-.098	.962
悲しい気持ちだ	.010	.024	.833
気分が落ち込み、沈む	-.035	.090	.805
心が暗くなる	.081	.134	.713
泣きたい気分	.175	.102	.629
因子間相関	I	II	III
I	—	.634	.611
II		—	.672
III			—

1-3. 満足度項目(12 項目)

本研究では、ありがた迷惑を受けた際に感じる「ありがたさ」を測定するため、満足や感謝に関する 12 項目を作成した。場面ごとに主因子法・Promax 回転を行った結果、固有値 1 以上の基準から両場面とも 1 因子構造が確認された。どちらも因子名としては、相手の好意に対しての満足感や感謝などの項目で構成されているため、因子名は「満足度」と命名した。他者勝手行為における信頼性は $\alpha = .934$ 、過剰心配行為における信頼性は $\alpha = .914$ であった。また、各場面の因子負荷量は Table 5、Table 6 に示す。

Table 5 他者勝手行為における満足度項目の因子分析（主因子法・Promax 回転）

項目内容	I
自分のために想ってくれるのは嬉しい	.816
親が自分のことを心配してくれるので嬉しい	.797
自分のためにしてくれたことには感謝している	.784
これは親の応援のひとつだと思う	.776
親が自分のことを励まそうしてくれるのは嬉しい	.754
親の子どもを心配してくれる気持ちは理解できる	.738
今の自分があるのは親が心配してくれたおかげだと思う	.737
親が自分のために何かしてくれていることは理解している	.731
自分が困ったときに相談にのってくれるのは嬉しい	.713
親が自分のことを考えてくれる発言であると思う	.710
親は子どもの世話を焼くものだと思う	.643
親が言っていることは正しいと思う	.635

Table 6 過剰心配場面における満足度項目の因子分析（主因子法・Promax 回転）

項目内容	I
自分のために想ってくれるのは嬉しい	.788
親が自分のことを心配してくれるので嬉しい	.786
自分のためにしてくれたことには感謝している	.731
親が自分のことを励まそうしてくれるのは嬉しい	.722
自分が困ったときに相談にのってくれるのは嬉しい	.710
親の子どもを心配してくれる気持ちは理解できる	.706
今の自分があるのは親が心配してくれたおかげだと思う	.690
親が自分のことを考えてくれる発言であると思う	.680
親は子どもの世話を焼くものだと思う	.661
親が自分のために何かしてくれていることは理解している	.643
これは親の応援のひとつだと思う	.612
親が言っていることは正しいと思う	.505

2. 尺度間の相関係数

2-1. 場面ごとにおける尺度間の相関係数

まずリアクタンス特性総合尺度と不快感の指標としてのストレス尺度、その行為に対しての満足度の相関係数を場面ごとに算出し、各尺度間の関連について検討した。他者勝手場面における尺度間の相関係数は Table 7、過剰心配場面における尺度間の相関係数は Table 8 に示す。

Table 7 他者勝手行為におけるリアクタンス特性総合尺度、ストレス尺度、満足度の相関係数

	リアクタンス特性	ストレス	満足度	平均値	SD
リアクタンス特性	—	.376 **	.072	3.01	.568
ストレス		—	.044	2.65	.947
満足度			—	3.55	.865

** $p = .01$

Table 8 過剰心配行為におけるリアクタンス総合特性、ストレス尺度、満足度の相関係数

	リアクタンス特性	ストレス	満足度	平均値	SD
リアクタンス特性	—	.284 **	.069	3.01	.568
ストレス		—	-.139 *	2.06	.882
満足度			—	3.77	.751

* $p = .05$ ** $p = .01$

Table 7 より、他者勝手行為においては、リアクタンス特性総合尺度とストレス尺度の間には正の相関が示された。リアクタンス特性とストレスの関連が示された。

Table 8 より、過剰心配行為においては、リアクタンス特性総合尺度とストレスに弱い正の相関が示され、ストレス尺度と満足度には弱い負の相関が示された。リアクタンス特性とストレスの関連、不愉快の指標であるストレスと満足度の関連が示された。

2-2. 場面ごとにおける下位尺度間の相関係数

尺度間における関連が示されたため、場面ごとにおけるリアクタンス特性総合尺度、ストレス尺度の下位尺度間の相関係数を算出した。他者勝手場面における下位尺度間の相関係数は Table 9、過剰心配行為における下位尺度間の相関係数は Table 10 に示す。

Table 9 より、感情的反発は情緒不安、怒り、抑うつにそれぞれ弱い正の相関が示された。直接的な自由獲得の行使は情緒不安、怒りにそれぞれ弱い正の相関が示された。意思決定の自由は怒りに弱い正の相関が示された。干渉への認知は情緒不安に正の相関、怒りと抑うつにそれぞれ弱い正の相関が示された。また、ストレスの下位尺度である情緒不安は満足度と弱い正の相関が示された。

リアクタンス特性の下位尺度は、意思決定の自由は怒りのみ関連が示されたが、他の下位尺度はストレスの下位尺度それぞれとの関連が示されており、他者勝手場面ではリアクタンス下位尺度の感情的反発、直接的自由獲得の行使、干渉への認知とストレスとの関連が明らかとなった。

Table 10 より、感情的反発は情緒不安、怒りにそれぞれ弱い正の相関が示された。直接的な自由獲得の行使は情緒不安、怒り、抑うつにそれぞれ弱い正の相関が示された。意思決定の自由はストレスに関する下位尺度との相関が見られなかったが、満足度とは弱い正の相関が示された。干渉への認知は情緒不安、怒り、抑うつにそれぞれ弱い正の相関が示された。また、ストレスの下位尺度である怒りは満足度と弱い負の相関が示された。

リアクタンス特性の下位尺度は、意思決定の自由を除き、ストレスの下位尺度それぞれとの関連が示された。過剰心配場面ではリアクタンス下位尺度の感情的反発、直接的自由獲得の行使、干渉への認知とストレスとの関連が明らかとなった。

Table 9 他者勝手場面における下位尺度間の相関係数

	感情的反発	直接的自由獲得の行使	意思決定の自由	干渉への認知	情緒不安	怒り	抑うつ	満足度	平均値	SD
感情的反発	—	.360 **	.401 **	.349 **	.288 **	.298 **	.215 *	.135	3.26	0.85
直接的自由獲得の行使		—	.157 *	.388 **	.298 **	.254 **	.227	.002	2.35	0.85
意思決定の自由			—	.175 *	.038	.145 *	.057	.040	3.56	0.73
干渉への認知				—	.413 **	.318 **	.292 *	-.023	2.52	0.83
情緒不安					—	.532 **	.679 *	.144 *	2.50	1.00
怒り						—	.656 *	-.117	2.84	1.19
抑うつ							—	-.035	2.84	1.20
満足度								—	3.55	0.87

* $p=.05$ ** $p=.01$

Table 10 過剰心配場面における下位尺度間の相関係数

	感情的反発	直接的自由獲得の行使	意思決定の自由	干渉への認知	情緒不安	怒り	抑うつ	満足度	平均値	SD
感情的反発	—	.360 **	.401 **	.349 **	.173 *	.242 **	.100	.076	3.26	0.85
直接的自由獲得の行使		—	.157 *	.388 **	.275 **	.242 **	.221 **	-.030	2.35	0.85
意思決定の自由			—	.175 *	.004	.026	.056	.177 *	3.56	0.73
干渉への認知				—	.374 **	.251 **	.269 **	-.097	2.52	0.83
情緒不安					—	.626 **	.630 **	-.113	1.90	0.90
怒り						—	.680 **	-.240 *	2.30	1.16
抑うつ							—	-.019	2.24	1.10
満足度								—	3.77	0.75

* $p=.05$ ** $p=.01$

3. 場面ごとによるリアクタンス特性と不快感であるストレスの関連

3-1. 他者勝手行為におけるリアクタンス特性と満足度によるストレス得点の差異

Table 9、Table10 より、他者勝手行為と過剰心配行為におけるリアクタンス特性と不快感の指標であるストレスには関係性が示された。関係性だけでなく、リアクタンス特性が不快感にどのような影響を与えているのかを検討するために、リアクタンス特性と満足度を独立変数に、ストレスを従属変数に二要因分散分析を行った。リアクタンス特性と満足度を、中央値を基準に高低に分け、場面ごとにストレス得点の差を比較した。

リアクタンス特性尺度得点の中央値を算出し、中央値より得点の高い群を「リアクタンス特性高群」、低い群を「リアクタンス低群」と群分けを行った。また同様に満足度得点も高低群に群分けし、ストレス得点を従属変数に二要因分散分析を行った。それぞれの平均値、SD などの詳細は Table 11 に示す。

Table 11 他者勝手行為におけるリアクタンス特性、満足度による
ストレス得点の比較及び平均と SD

リアクタンス特性	高		低	
満足度	高	低	高	低
N	52	59	45	51
M	3.08	3.00	2.29	2.32
SD	0.80	0.89	0.92	0.89
検定結果 a)				
リアクタンス特性の主効果	$F(1,203)=35.53$		$p<.01$	
満足度の主効果	$F(1,203)=0.03$		$n.s.$	
リアクタンス特性×満足度	$F(1,203)=0.18$		$n.s.$	
a) カッコ内の数値は自由度と誤差を示す				

二要因分散分析の結果、他者勝手場面においてはリアクタンス特性の主効果 ($F(1, 203) = 35.53, p < .01$) が有意であった。しかし、満足度の主効果、リアクタンス特性と満足度の交互作用に有意差はなかった。

3-2. 過剰心配行為におけるリアクタンス特性と満足度によるストレス得点の差異

他者勝手行為と同様の手続きで分析を行い、過剰心配行為におけるリアクタンス特性と満足度、ストレスの関連を検討した。過剰心配行為における、それぞれの平均値、SD などの詳細は Table 12 に示す。

Table 12 過剰心配行為におけるリアクタンス特性、満足度による
ストレス得点の比較及び平均と SD

リアクタンス特性 満足度	高		低	
	高	低	高	低
N	39	72	58	38
M	2.97	1.38	2.72	1.33
SD	0.59	0.33	0.41	0.36
検定結果 a)				
リアクタンス特性の主効果	$F(1,202)=19.76$		$p < .01$	
満足度の主効果	$F(1,202)=2.58$		<i>n.s.</i>	
リアクタンス特性 × 満足度	$F(1,202)=0.10$		<i>n.s.</i>	

a) カッコ内の数値は自由度と誤差を示す

二要因分散分析の結果、過剰心配行為においてはリアクタンス特性の主効果 ($F(1, 202) = 19.76, p < .01$) が有意であった。しかし、満足度の主効果、リアクタンス特性と満足度の交互作用に有意差はなかった。

4. リアクタンス下位尺度と不快感の関連

結果 3-1、3-2 より、リアクタンス特性は両場面ともに主効果が有意であった。さらに詳細なリアクタンスと不快感の関連を見るため、リアクタンス特性の下位尺度によって違いによってストレス得点に差があるのかを検討した。リアクタンス特性の下位尺度「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「意思決定の自由」、「干渉への認知」をそれぞれ独立変数にし設定し分析を行った。まず、リアクタンス特性下位尺度それぞれの中央値を算出し、中央値を基準に高低と群分けした。また、同様に満足度も高低に分け、ストレスを従属変数とし場面ごとに二要因分散分析を行った。

4-1. 他者勝手行為におけるリアクタンス特性と満足度によるストレス得点の差異

他者勝手場面における、リアクタンス特性下位尺度「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「意思決定の自由」、「干渉への認知」のそれぞれの平均値、SD などの詳細は Table 13-1、Table 13-2、Table 13-3、Table 13-4 の順に示す。

Table 13-1 他者勝手行為における感情的反発、満足度による
ストレス得点の比較及び平均と SD

感情的反発 満足度	高		低	
	高	低	高	低
N	39	54	58	56
M	2.87	2.79	2.34	2.48
SD	0.91	1.02	0.93	0.85
検定結果 a)				
感情的反発の主効果	$F(1,203)=10.31$		$p<.01$	
満足度の主効果	$F(1,203)=0.06$		<i>n.s.</i>	
感情的反発×満足度	$F(1,203)=0.64$		<i>n.s.</i>	

a) カッコ内の数値は自由度と誤差を示す

二要因分散分析の結果、感情的反発の主効果 ($F(1, 203)=10.31, p<.01$) が有意であった。しかし、満足度の主効果、感情的反発と満足度の交互作用に有意差はなかった。

Table 13-2 他者勝手行為における直接的な自由回復の行使、満足度による
ストレス得点の比較及び平均と SD

直接的な自由回復の行使 満足度	高		低	
	高	低	高	低
N	58	51	38	59
M	3.04	2.80	2.39	2.45
SD	0.92	0.93	0.88	0.95
検定結果 a)				
直接的な自由回復の行使 主効果	$F(1,203)=14.79$		$p<.01$	
満足度の主効果	$F(1,203)=0.52$		<i>n.s.</i>	
直接的な自由回復の行使×満足度	$F(1,203)=1.41$		<i>n.s.</i>	

a) カッコ内の数値は自由度と誤差を示す

二要因分散分析の結果、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 203)=14.79, p<.01$) が有意であった。しかし、満足度の主効果、直接的な自由回復の行使と満足度の交互作用は見られなかった。

Table 13-3 他者勝手行為における意思決定の自由、満足度による
ストレス得点の比較及び平均と SD

意思決定の自由 満足度	高		低	
	高	低	高	低
N	39	71	46	51
M	2.75	2.57	2.69	2.61
SD	0.94	0.95	1.03	0.91
検定結果 a)				
意思決定の自由の主効果	$F(1,203)=0.91$		<i>n.s.</i>	
満足度の主効果	$F(1,203)=0.01$		<i>n.s.</i>	
意思決定の自由×満足度	$F(1,203)=0.13$		<i>n.s.</i>	
a) カッコ内の数値は自由度と誤差を示す				

二要因分散分析の結果、意思決定の自由の主効果、満足度的主効果、意思決定の自由と満足度の交互作用の全てに有意差はなかった。

Table 13-4 他者勝手行為における干渉への認知、満足度による
ストレス得点の比較及び平均と SD

干渉への認知 満足度	高		低	
	高	低	高	低
N	62	60	38	50
M	3.15	2.88	2.37	2.43
SD	0.81	1.02	0.91	0.85
検定結果 a)				
干渉への認知の主効果	$F(1,203)=22.60$		$p<.01$	
満足度の主効果	$F(1,203)=0.67$		$n.s.$	
干渉への認知×満足度	$F(1,203)=1.67$		$n.s.$	
a) カッコ内の数値は自由度と誤差を示す				

二要因分散分析の結果、干渉への認知の主効果 ($F(1, 203)=22.60, p<.01$) が有意であった。しかし、満足度的主効果、干渉への認知と満足度の交互作用に有意差はなかった。

4-2. 過剰心配場面におけるリアクタンス下位尺度と満足度によるストレス得点の比較

過剰心配場面における、リアクタンス特性下位尺度「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「意思決定の自由」、「干渉への認知」それぞれの平均値、SDなどの詳細は Table 14-1、Table 14-2、Table 14-3、Table 14-4 の順に示す。

Table 14-1 過剰心配行為における感情的反発、満足度による
ストレス得点の比較及び平均と SD

感情的反発 満足度	高		低	
	高	低	高	低
N	48	45	62	51
M	2.09	2.29	1.83	2.01
SD	0.98	0.81	0.78	0.89
検定結果 a)				
感情的反発の主効果	$F(1,202)=4.95$		$p < .05$	
満足度の主効果	$F(1,202)=2.44$		<i>n.s.</i>	
感情的反発 × 満足度	$F(1,202)=0.01$		<i>n.s.</i>	

a) カッコ内の数値は自由度と誤差を示す

二要因分散分析の結果、感情的反発の主効果 ($F(1, 203)=4.95, p < .05$) が有意であった。しかし、満足度の主効果、感情的反発と満足度の交互作用に有意差はなかった。

Table 14-2 過剰心配行為における直接的な自由回復の行使、満足度による
ストレス得点の比較及び平均と SD

直接的な自由回復の行使 満足度	高		低	
	高	低	高	低
N	48	48	50	60
M	2.08	1.89	2.55	1.77
SD	0.91	0.90	0.78	0.74
検定結果 a)				
直接的な自由回復の行使 主効果	$F(1,202)=16.75$		$p < .01$	
満足度の主効果	$F(1,202)=2.24$		<i>n.s.</i>	
直接的な自由回復の行使 × 満足度	$F(1,202)=6.45$		$p < .05$	

a) カッコ内の数値は自由度と誤差を示す

二要因分散分析の結果、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 203)=14.79, p < .01$) は有意であったが、満足度の主効果は有意でなかった。

また、直接的な自由回復の行使と満足度 ($F(1, 203)=6.45, p < .05$) の交互作用が有意であったため、これらの単純主効果検定を行った。単純主効果の結果、直接的な自由回復

の行使得点高群において、満足度による有意差が見られた ($p<.01$)。また、満足度低群において直接的な自由回復の行使によるストレス得点の平均値に有意差が見られた ($p<.05$)。これらの詳細なストレス得点の差については Figure 1 を参照。

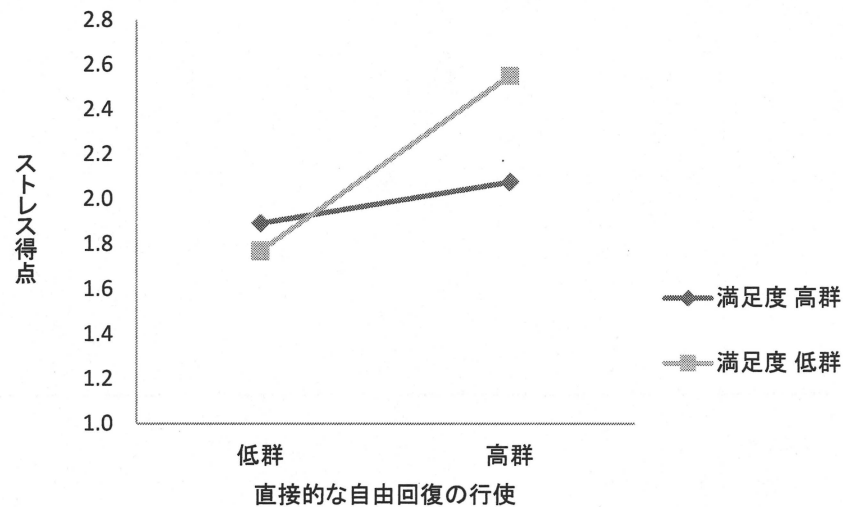


Figure 1 過剰心配行為における直接的な自由回復の行使、満足度による
ストレス得点の比較

Table 14-3 過剰心配行為における意思決定の自由、満足度による
ストレス得点の比較及び平均と SD

意思決定の自由 満足度	高		低	
	高	低	高	低
N	56	66	54	30
M	1.97	2.30	1.98	2.09
SD	0.92	0.91	0.90	0.83
検定結果 a)				
意思決定の自由の主効果	$F(1,202)=0.64$		$n.s.$	
満足度の主効果	$F(1,202)=3.02$		$n.s.$	
意思決定の自由 × 満足度	$F(1,202)=0.68$		$n.s.$	

a) カッコ内の数値は自由度と誤差を示す

二要因分散分析の結果、意思決定の自由の主効果、満足度の主効果、意思決定の自由と満足度の交互作用の全てに有意差はなかった。

Table 14-4 過剰心配行為における干渉への認知、満足度による
ストレス得点の比較及び平均と SD

干渉への認知 満足度	高		低	
	高	低	高	低
N	36	60	48	62
M	2.36	1.68	2.20	2.14
SD	0.99	0.71	0.93	0.81

検定結果 a)

干渉への認知の主効果 $F(1,202)=9.11$ $p < .01$

満足度的主効果 $F(1,202)=1.50$ $n.s.$

干渉への認知 × 満足度 $F(1,202)=6.52$ $p < .05$

a) カッコ内の数値は自由度と誤差を示す

二要因分散分析の結果、干渉への認知の主効果 ($F(1, 203)=22.60, p<.01$) は有意であったが、満足度的主効果は有意ではなかった。

また、干渉への認知と満足度 ($F(1, 207)=6.52, p<.05$) の交互作用が有意であったため、これらの単純主効果検定を行った。単純主効果の結果、干渉への認知得点低群において、満足度による有意差が見られた ($p<.01$)。また、満足度高群において干渉への認知によるストレス得点に有意差が見られた ($p<.01$)。これらの詳細なストレス得点の差については Figure 2 を参照。

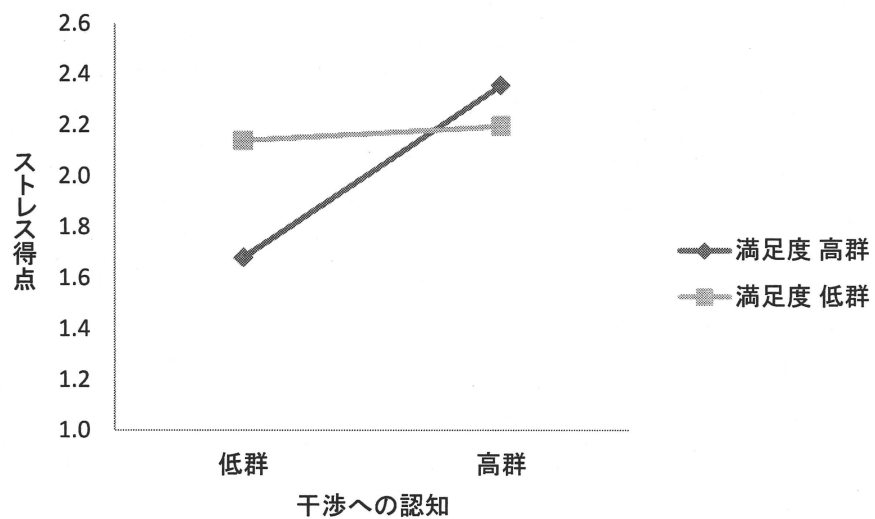


Figure 2 過剰心配場面における干渉への認知、満足度による
ストレス得点の比較

5. 不快感の質について場面ごとの検討

不快感の指標であるストレスとリアクタンス特性の関連は上記の分析にて示された。しかし、ストレスには情緒不安、怒り、抑うつという3つの下位尺度で構成されており、場面やリアクタンス特性によって違いがあることが予想される。そこでストレス下位尺度の「情緒不安」、「怒り」、「抑うつ」にはどのような特徴が見られるのかを検討するため、これら3つの下位尺度を従属変数、リアクタンスの下位尺度や満足度を独立変数として二要因分散分析を場面ごとに行った。

5-1 他者勝手行為

5-1-1 情緒不安

感情的反発と満足度を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 203) = 9.16, p < .01$) が有意であった。満足度的主効果 ($F(1, 203) = 0.39, n.s.$)、感情的反発と満足度の交互作用 ($F(1, 203) = 1.91, n.s.$) であり有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と満足度を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 203) = 18.11, p < .01$) が有意であった。満足度的主効果 ($F(1, 203) = 2.87, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と満足度の交互作用 ($F(1, 203) = 1.05, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と満足度を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 203) = 0.23, n.s.$)、満足度的主効果 ($F(1, 203) = 1.15, n.s.$)、意思決定の自由と満足度の交互作用 ($F(1, 203) = 0.51, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と満足度を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 203) = 24.23, p < .01$) が有意であった。満足度的主効果 ($F(1, 203) = 0.84, n.s.$)、干渉への認知と満足度の交互作用 ($F(1, 203) = 2.52, n.s.$) に有意差は見られなかった。

他者勝手行為にて生起する不快感「情緒不安」は、リアクタンス特性の「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」が影響していることが明らかとなった。

5-1-2 怒り

感情的反発と満足度を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 203) = 9.65, p < .01$) が有意であった。満足度的主効果 ($F(1, 203) = 2.24, n.s.$)、感情的反発と満足度の交互作用 ($F(1, 203) = 0.05, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と満足度を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 203) = 4.92, p < .05$) が有意であった。満足度的主効果 ($F(1, 203) = 0.75, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と満足度の交互作用 ($F(1, 203) = 1.13, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と満足度を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 203) = 2.99, n.s.$)、満足度的主効果 ($F(1, 203) = 2.58, n.s.$)、意思決定の自由と満足度の交互作用 ($F(1, 203) = 1.18, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と満足度を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 203) = 9.67, p < .01$) が有意であった。満足度的主効果 ($F(1, 203) = 0.57, n.s.$)、干渉への認知と満足度の交互作用 ($F(1, 203) = 0.96, n.s.$) に有意差は見られなかった。

他者勝手行為にて生起する不快感「怒り」は、リアクタンス特性の「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」が影響していることが明らかとなった。

5-1-3 抑うつ

感情的反発と満足度を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 203) = 4.09, p < .05$) が有意であった。満足度的主効果 ($F(1, 203) = 0.52, n.s.$)、感情的反発と満足度の交互作用 ($F(1, 203) = 0.02, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と満足度を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 203) = 6.54, p < .05$) が有意であった。満足度的主効果 ($F(1, 203) = 0.01, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と満足度の交互作用 ($F(1, 203) = 1.02, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と満足度を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 203) = 0.54, n.s.$)、満足度的主効果 ($F(1, 203) = 0.21, n.s.$)、意思決定の自由と満足度の交互作用 ($F(1, 203) = 0.73, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と満足度を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 203)$

=11.75, $p<.01$) が有意であった。満足度の主効果 ($F(1, 203)=0.00, n.s.$)、干渉への認知と満足度の交互作用 ($F(1, 203)=1.42, n.s.$) に有意差は見られなかった。

他者勝手行為にて生起する不快感「抑うつ」は、リアクタンス特性の「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」が影響していることが明らかとなった。

5-2 過剰心配場面

5-2-1 情緒不安

感情的反発と満足度を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 202)=2.63, n.s.$)、満足度の主効果 ($F(1, 202)=1.66, n.s.$)、感情的反発と満足度の交互作用 ($F(1, 202)=0.09, n.s.$) に有意差はなかった。

直接的な自由回復の行使と満足度を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 202)=16.21, p<.01$) が有意であった。満足度の主効果 ($F(1, 202)=1.42, n.s.$) は有意でなかった、直接的な自由回復の行使と満足度の交互作用 ($F(1, 202)=5.95, p<.05$) は有意であった。直接的な自由回復の行使と満足度の交互作用が有意であったため、単純主効果検定を行った。その結果、直接的な自由回復の行使の高群において、満足度による差が見られた($p<.05$)。また、満足度の低群における直接的な自由回復の行使の高低による情緒不安得点の差が見られた。過剰心配場面における情緒不安得点の差異についての詳細は Figure 3 を参照。

意思決定の自由と満足度を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 202)=0.00, n.s.$)、満足度の主効果 ($F(1, 202)=1.54, n.s.$)、意思決定の自由と満足度の交互作用 ($F(1, 202)=0.21, n.s.$) に有意差はなかった。

干渉への認知と満足度を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 202)=10.92, p<.01$) が有意であった。満足度の主効果 ($F(1, 202)=1.08, n.s.$) は有意でなく、干渉への認知と満足度の交互作用 ($F(1, 202)=4.62, p<.05$) に有意差が見られた。干渉への認知と満足度の交互作用が有意であったため、単純主効果検定を行った。その結果、干渉への認知の低群において、満足度による差が見られた($p<.05$)。また、満足度における干渉への認知の高低による情緒不安得点に差が見られた($p<.01$)。

過剰心配行為における情緒不安得点の差異についての詳細は Figure 4 を参照。

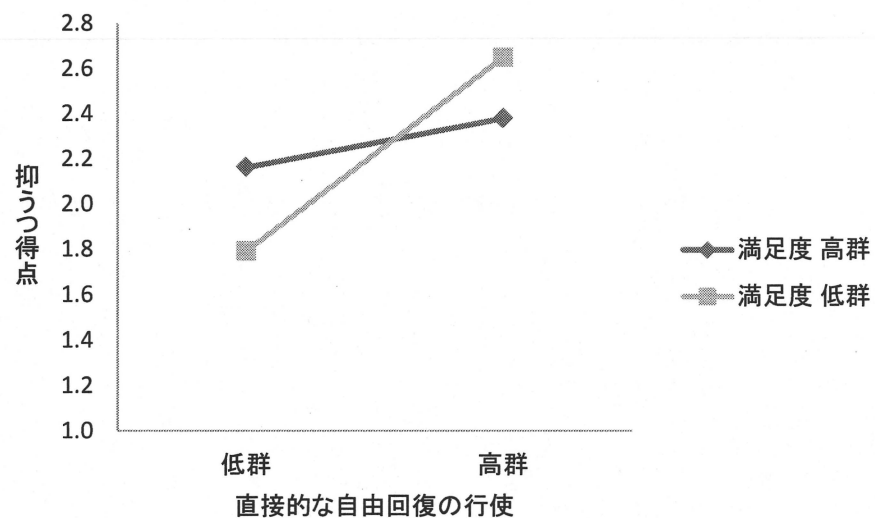


Figure 3 過剰心配場面における直接的な自由回復の行使、満足度による
情緒不安得点の差異

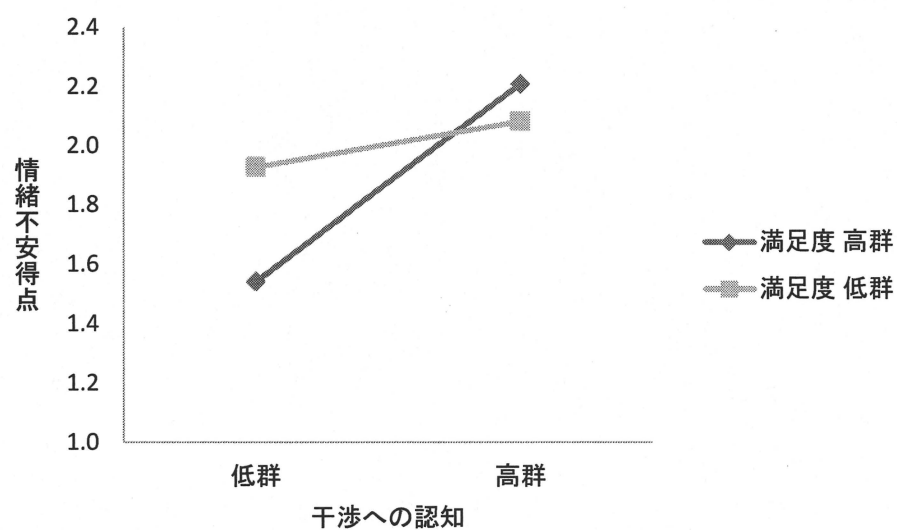


Figure 4 過剰心配場面における干渉への認知、満足度による
情緒不安得点の差異

過剰心配行為で生起する不快感「情緒不安」は、リアクタンス特性「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」が影響し、さらにこの2つのリアクタンス特性においては満足度が影響していることが明らかとなった。

5-2-2 怒り

感情的反発と満足度を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 202) = 11.59, p < .01$)、満足度的主効果 ($F(1, 202) = 9.93, p < .01$) が有意であった、感情的反発と満足度の交互作用 ($F(1, 202) = 1.47, n.s.$) 有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と満足度を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 202) = 7.01, p < .01$)、満足度的主効果 ($F(1, 202) = 9.66, p < .01$) が有意であった。直接的な自由回復の行使と満足度の交互作用 ($F(1, 202) = 0.66, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と満足度を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 202) = 2.95, n.s.$) は有意でなかった。満足度的主効果 ($F(1, 202) = 11.45, p < .01$) に有意であった。意思決定の自由と満足度の交互作用 ($F(1, 202) = 0.29, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と満足度を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 202) = 3.27, n.s.$) は有意でなかった。満足度的主効果 ($F(1, 202) = 8.03, p < .01$) は有意であり、干渉への認知と満足度の交互作用 ($F(1, 202) = 3.29, n.s.$) に有意差は見られなかった。

過剰心配行為で生起する不快感「怒り」は、リアクタンス特性「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」が影響し、またリアクタンス特性下位尺度それぞれにおいて満足度的主効果が見られたことから、満足度が大きく関係していることが明らかとなった。

5-2-3 抑うつ

感情的反発と満足度を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 202) = 1.53, n.s.$)、満足度的主効果 ($F(1, 202) = 0.04, n.s.$)、感情的反発と満足度の交互作用 ($F(1, 202) = 0.03, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と満足度を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 202) = 12.87, p < .01$) が有意であった。満足度的主効果 ($F(1, 202) = 0.21, n.s.$) は有意でなかった。直接的な自由回復の行使と満足度の交互作用 ($F(1, 202) = 0.33, p < .05$) に有意であった。直接的な自由回復の行使と満足度の交互作用が見

られたために、単純主効果検定を行った。その結果、満足度の低群において直接的な自由回復の行使による抑うつ得点の差が見られた ($p < .01$)。過剰心配場面における抑うつ得点の差異についての詳細は Figure 5 を参照。

意思決定の自由と満足度を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 202) = 1.57, n.s.$)、満足度的主効果 ($F(1, 202) = 0.07, n.s.$)、意思決定の自由と満足度の交互作用 ($F(1, 202) = 2.28, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と満足度を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 202) = 4.53, p < .05$) が有意であった。満足度的主効果 ($F(1, 202) = 0.05, n.s.$) は有意でなく、干渉への認知と満足度の交互作用 ($F(1, 202) = 9.25, p < .01$) に有意差はなかった。

干渉への認知と満足度の交互作用が有意であったため、単純主効果検定を行った。その結果、干渉への認知の高群において満足度による差が見られた ($p < .05$)。また、満足度の高群において、干渉への認知による抑うつ得点の差が見られた ($p < .01$)。

過剰心配行為における抑うつ得点の差異についての詳細は Figure 6 を参照。

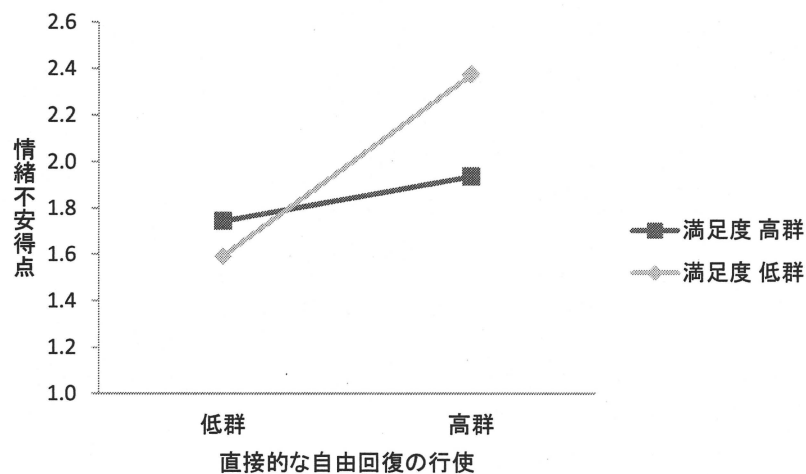


Figure 5 過剰心配場面における直接的な自由回復への行使、満足度による抑うつ得点の比較

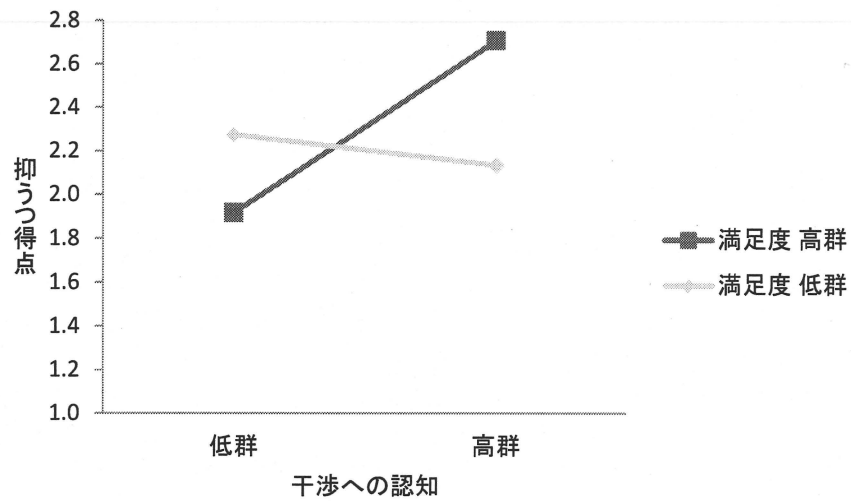


Figure 6 過剰心配場面における干渉への認知、満足度による

抑うつ得点の比較

過剰心配行為で生起する不快感「抑うつ」は、リアクタンス特性「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」が影響していることが明らかとなった。またこの2つのリアクタンス特性における満足度の交互作用が有意になったことから、この2つのリアクタンス特性における満足度も「抑うつ」得点に影響していることが明らかとなった。

6. ありがた迷惑行為を受けた際の性差について影響の検討

6-1. リアクタンス特性と性差における不快感の検討

ありがた迷惑行為を受けた際に男女で差があるのかを確認するため、性差とリアクタンス特性を独立変数、ストレスを従属変数とした二要因分散分析を場面ごとに行った。

他者勝手場面においては、リアクタンス特性の主効果 ($F(1, 201)=32.50, p<.01$) が有意であった。性差の主効果 ($F(1, 201)=0.08, n.s.$)、リアクタンス特性と性差の交互作用 ($F(1, 201)=1.26, n.s.$) に有意差は見られなかった。

過剰心配行為においては、リアクタンス特性の主効果 ($F(1, 201)=17.60, p<.01$) が有意であった。性差の主効果 ($F(1, 201)=0.51, n.s.$)、リアクタンス特性と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.52, n.s.$) に有意差は見られなかった。

他者勝手行為、過剰心配行為ともにリアクタンス特性の主効果は有意であったが、性差による主効果は有意でなかった。

6-2. リアクタンス下位尺度と性差における不快感の検討

結果 6-1 より性差とリアクタンス特性の関連は示されなかったが、結果 5 のように下位尺度ごとによって違いが見られることが考えられるため、リアクタンス特性下位尺度「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「意思決定の自由」、「干渉への認知」それぞれと性差を独立変数、ストレス下位尺度をそれぞれ従属変数とし分析を場面ごとに行った。

6-2-1. 他者勝手行為

6-2-1-1. 情緒不安

感情的反発と満足度を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 201)=0.15, p<.01$) が有意であった。性差の主効果 ($F(1, 201)=2.08, n.s.$) は有意でなかった。感情的反発と性差の交互作用 ($F(1, 201)=4.90, p<.05$) に有意差が見られた。

感情的反発と性差による交互作用が有意であったため、単純主効果検定を行った。その結果、感情的反発の低群において性別による情緒不安得点に差が見られた ($p<.05$)。また、女性における感情的反発得点による情緒不安得点による差が見られた ($p<.01$)。他者勝手場面における感情的反発と性差、情緒不安得点の差異についての詳細は Figure 7 を参照。

直接的な自由回復の行使と性別を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行

使の主効果 ($F(1, 201)=13.84, p<.01$) が有意であった。性差の主効果 ($F(1, 201)=0.00, n.s.$) は有意ではなかった。直接的な自由回復の行使と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.27, p<.05$) に有意差が見られた。直接的自由回復の行使と性差による交互作用に有意差が見られたため、単純主効果検定を行った。その結果、女性における直接的な自由回復の行使得点による情緒不安得点による差が見られた ($p<.01$)。他者勝手行為における直接的な自由回復の行使と性差、情緒不安得点の差異についての詳細は Figure 8 を参照。

意思決定の自由と性差を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 201)=0.78, n.s.$)、性差の主効果 ($F(1, 201)=0.29, n.s.$)、意思決定の自由と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.47, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と性差を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 201)=20.38, p<.01$) が有意であった。性差の主効果 ($F(1, 201)=0.76, n.s.$)、干渉への認知と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.89, n.s.$) に有意差は見られなかった。

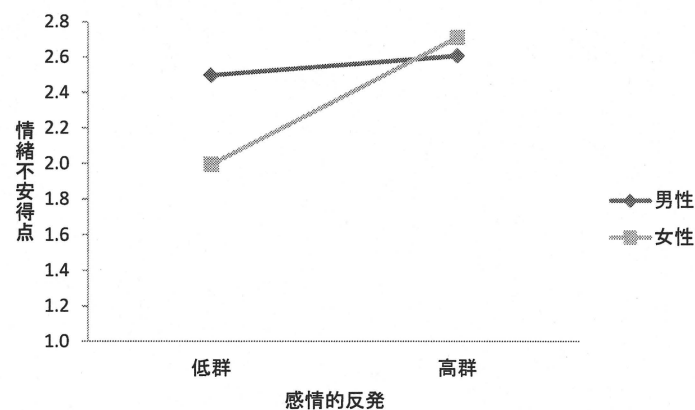


Figure 7 他者勝手行為における感情的反発と性差による情緒不安得点の差異

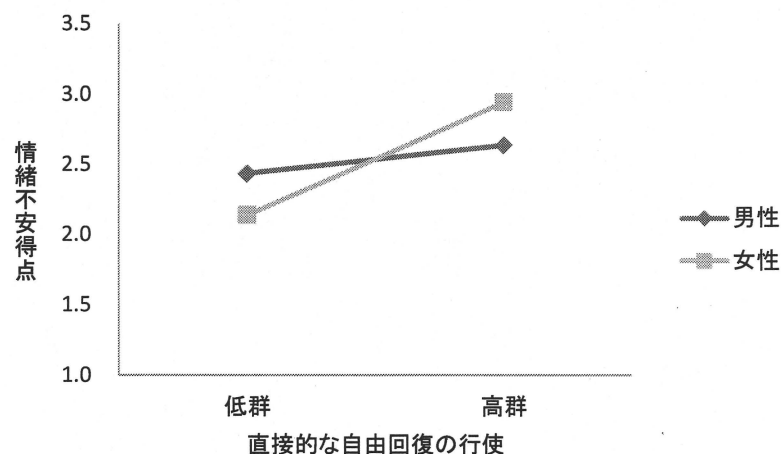


Figure 8 他者勝手行為における直接的な自由回復の行使と性差による情緒不安得点の差異

他者勝手場面において生起される不快感「情緒不安」への性差の影響は、リアクタンス特性下位尺度における「感情的反発」と性差、「直接的な自由回復の行使」と性差の交互作用においてのみ有意であった。

6-2-1-2. 怒り

感情的反発と満足度を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 201) = 6.86, p < .01$) が有意であった。性差の主効果 ($F(1, 201) = 0.96, n.s.$) は有意でなく、感情的反発と性差の交互作用 ($F(1, 201) = 1.07, p < .05$) に有意差が見られた。感情的反発と性差による交互作用に有意差が見られたため、単純主効果検定を行った。その結果、女性における感情反発得点の高低によって怒り得点に差が見られた ($p < .05$)。怒り得点の差異についての詳細は Figure 9 を参照。

直接的な自由回復の行使と性差を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 201) = 6.03, p < .05$) が有意であった。性差の主効果 ($F(1, 201) = 3.79, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と性差の交互作用 ($F(1, 201) = 0.04, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と性差を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 201) = 2.07, n.s.$)、性差の主効果 ($F(1, 201) = 2.29, n.s.$)、意思決定の自由と性差の交互作用 ($F(1, 201) = 0.28, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と性差を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 201) = 9.21, p < .01$) が有意であった。性差の主効果 ($F(1, 201) = 1.87, n.s.$)、干渉への認知と性差の交互作用 ($F(1, 201) = 1.12, n.s.$) に有意差は見られなかった。

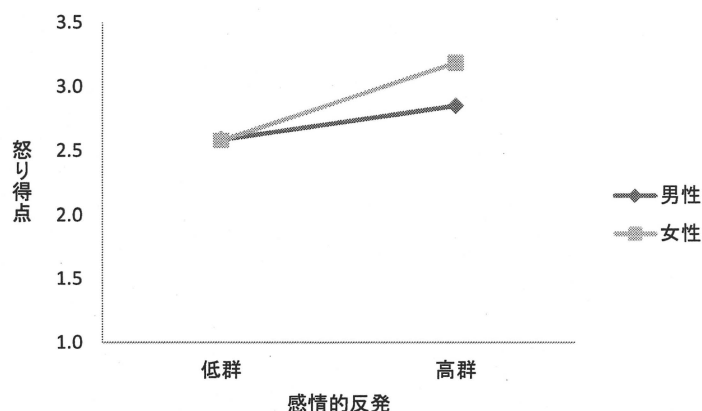


Figure 9 他者勝手場面における感情的反発と性差による怒り得点の差異

他者勝手場面において生起される不快感「怒り」への性差の影響は、リアクタンス特性下位尺度における「感情的反発」と性差の交互作用においてのみ有意であった。

6-2-1-3. 抑うつ

感情的反発と満足度を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 201) = 2.35, n.s.$)、性差の主効果 ($F(1, 201) = 1.80, n.s.$)、感情的反発と性差の交互作用 ($F(1, 201) = 2.73, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と性差独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 201) = 7.60, p < .01$)、性差の主効果 ($F(1, 201) = 5.42, p < .05$) が有意であった。直接的な自由回復の行使と性差の交互作用 ($F(1, 201) = 1.37, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と性差を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 201) = 0.25, n.s.$)、性差の主効果 ($F(1, 201) = 3.11, n.s.$)、意思決定の自由と性差の交互作用 ($F(1, 201) = 0.08, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と性差を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 201) = 10.56, p < .01$) が有意であった。性差の主効果 ($F(1, 201) = 3.09, n.s.$)、干渉への認知と性差の交互作用 ($F(1, 201) = 0.10, n.s.$) に有意差は見られなかった。

他者勝手行為において生起される不快感「抑うつ」への性差の影響は、リアクタンス特性下位尺度における「直接的な自由回復の行使」における性差の主効果が有意だった。

6-2-2. 過剰心配場面

6-2-2-1. 情緒不安

感情的反発と性別を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 201) = 2.25, n.s.$)、満足度的主効果 ($F(1, 201) = 0.54, n.s.$)、感情的反発と満足度の交互作用 ($F(1, 201) = 0.78, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と性差を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 202) = 13.18, p < .01$) が有意であった。性差の主効果 ($F(1, 202) = 0.09, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と満足度の交互作用 ($F(1, 202) = 1.37, n.s.$) に

有意差は見られなかった。

意思決定の自由と性差を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 201)=0.03, n.s.$)、性差の主効果 ($F(1, 201)=0.27, n.s.$)、意思決定の自由と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.54, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と性差を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 201)=9.97, p<.01$) が有意であった。性差の主効果 ($F(1, 201)=0.12, n.s.$)、干渉への認知と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.04, n.s.$) に有意差は見られなかった。

過剰心配行為において生起される不快感「情緒不安」への性差の影響は、どの分析においても有意ではなかった。

6-2-2-2. 怒り

感情的反発と満足度を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 201)=6.87, p<.05$)、性別の主効果 ($F(1, 201)=4.83, p<.05$) が有意であったが、感情的反発と性別の交互作用 ($F(1, 201)=0.20, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と性差を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 201)=8.87, p<.01$)、性差の主効果 ($F(1, 201)=10.92, p<.01$) が有意であった。直接的な自由回復の行使と性差の交互作用 ($F(1, 202)=1.85, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と性差を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 201)=1.03, n.s.$) は有意でなく、性差の主効果 ($F(1, 201)=5.99, p<.05$) が有意であった。意思決定の自由と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.65, n.s.$) 有意差は見られなかった。

干渉への認知と性差を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 201)=2.66, n.s.$)、性差の主効果 ($F(1, 201)=6.85, n.s.$)、干渉への認知と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.09, n.s.$) に有意差は見られなかった。

過剰心配行為において生起される不快感「怒り」への性差の影響は、「感情的反発」、「直接的な自由回復」、「意思決定の自由」において性差の主効果が有意であった。

6-2-2-3. 抑うつ

感情的反発と性差を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 201)=0.62, n.s.$)、満足度的主効果 ($F(1, 201)=2.04, n.s.$)、感情的反発と満足度の交互作用 ($F(1, 201)=0.07, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と性差を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 201)=12.77, p<.01$)、性差の主効果 ($F(1, 201)=5.17, p<.05$) が有意であった。直接的な自由回復の行使と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.00, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と性差を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 201)=1.14, n.s.$)、性差の主効果 ($F(1, 201)=2.60, n.s.$)、意思決定の自由と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.25, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と性差を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 201)=4.75, p<.01$) が有意であった。性差の主効果 ($F(1, 201)=2.52, n.s.$)、干渉への認知と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.04, n.s.$) に有意差は見られなかった。

過剰心配行為において生起される不快感「抑うつ」への性差の影響は、「直接的な自由回復の行使」における性差の主効果が有意であった。

7. 性差による満足度についての検討

7-1. リアクタンス特性と性差による満足についての検討

結果 6 より、ありがた迷惑行為を受けた際の不快感には性差の影響が見られるものもあった。しかし、不快感だけでなく、ありがた迷惑行為はその行為の「ありがたさ」をどれだけ認知しているかが重要になってくるため満足度と性差の検討を行った。性差とリアクタンス特性を独立変数、満足度を従属変数とした二要因分散分析を行った。

他者勝手場面においては、リアクタンス特性の主効果 ($F(1, 201)=0.09, n.s.$)、性差の主効果 ($F(1, 201)=2.78, n.s.$) が有意でなかった。リアクタンス特性と性差の交互作用 ($F(1, 201)=6.38, p<.01$) に有意差が見られた。リアクタンス特性と性差の交互作用に有意差が見られたため、単純主効果検定を行った。その結果、リアクタンス特性高群において性差による差が見られた ($p<.01$)。また、女性においてリアクタンス特性の高低

による満足度得点の差が見られた。 $(p<.05)$ 。満足度得点の差異についての詳細は Figure 10 を参照。

過剰心配行為においては、リアクタンス特性の主効果 ($F(1, 201)=0.03, n.s.$) は有意でなく、性差の主効果 ($F(1, 201)=5.59, p<.05$) は有意であった。リアクタンス特性と性差の交互作用 ($F(1, 201)=1.03, n.s.$) に有意差は見られなかった。

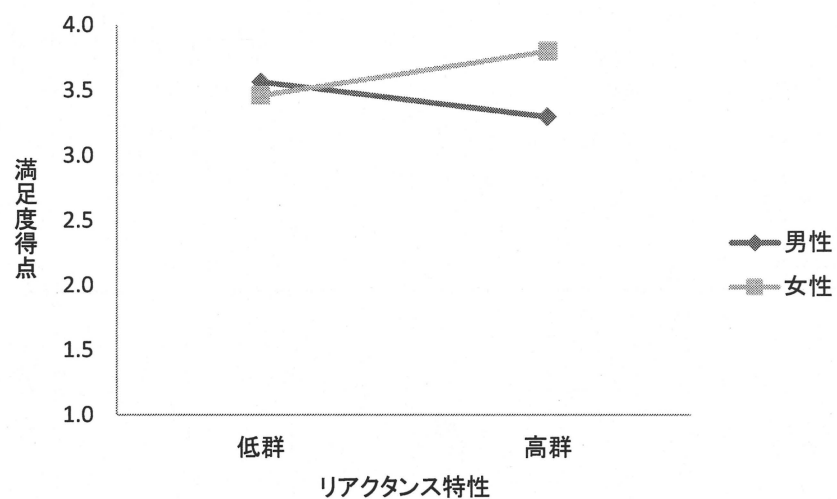


Figure 10 他者勝手行為におけるリアクタンス特性と性差による満足度得点の差異

他者勝手行為、過剰心配行為ともに性差による影響が見られた。他者勝手行為ではリアクタンス特性と性差の交互作用が有意であり、過剰心配行為では性差の主効果が有意であった。

7-2. リアクタンス下位尺度と性差による満足度についての検討

結果 7-1 より、性差とリアクタンス特性、満足度についての関連が示された。リアクタンス下位尺度ごとにも差が見られるのかを検討するため、リアクタンス特性の下位尺度「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「意思決定の自由」、「干渉への認知」それぞれと満足度を独立変数、満足度を従属変数とし二要因分散分析を場面ごとに行った。

7-2-1. 他者勝手行為における満足度

感情的反発と性差を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 201)=0.76, n.s.$)、満足度的主効果 ($F(1, 201)=1.50, n.s.$)、感情的反発と満足度の交互作用 ($F(1, 201)=0.79, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と性差を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 201)=0.04, n.s.$)、性差の主効果 ($F(1, 201)=2.27, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と性差の交互作用 ($F(1, 201)=2.77, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と性差を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 201)=0.11, n.s.$)、性差の主効果 ($F(1, 201)=2.68, n.s.$)、意思決定の自由と性差の交互作用 ($F(1, 201)=1.31, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と性差を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 201)=0.60, n.s.$)、性差の主効果 ($F(1, 201)=3.02, n.s.$)、干渉への認知と性差の交互作用 ($F(1, 201)=2.41, n.s.$) に有意差は見られなかった。

他者勝手行為において生起される満足度には性差の影響は見られなかった。

7-2-3. 過剰心配行為における満足度

感情的反発と性差を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 201)=0.55, n.s.$) は有意でなく、性差の主効果 ($F(1, 201)=4.74, p<.05$) は有意であった。感情的反発と満足度の交互作用 ($F(1, 201)=0.19, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と性差を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 201)=0.03, n.s.$) は有意でなく、性差の主効果 ($F(1, 201)=4.85, p<.05$) は有意であった。直接的な自由回復の行使と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.40, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と性差を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 201)=8.05, p<.01$)、性差の主効果 ($F(1, 201)=5.23, p<.05$) が有意であった。意思決定の自由と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.60, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と性差を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 201)=0.61, n.s.$) が有意でなく、性差の主効果 ($F(1, 201)=5.56, p<.01$) は有意であった。干渉への認知と性差の交互作用 ($F(1, 201)=0.34, n.s.$) に有意差は見られなかった。

過剰心配行為において生起される満足度は、リアクタンス下位尺度それぞれの分析において性差の主効果が有意であった。

8. 居住形態を考慮した分析

8-1. リアクタンス特性と居住形態による不快感についての検討

本調査において、ありがた迷惑行為の行為者と受け手の関係は親子と設定したため、居住形態によって差見られることが予想される。そこで、居住形態とリアクタンス特性を独立変数、ストレスを従属変数とした二要因分散分析を行った。

他者勝手行為においては、リアクタンス特性の主効果 ($F(1, 136)=28.95, p<.01$) が有意であり、居住形態の主効果 ($F(1, 136)=0.25, n.s.$)、リアクタンス特性と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=0.08, n.s.$) に有意差は見られなかった。

過剰心配行為においては、リアクタンス特性の主効果 ($F(1, 136)=19.72, p<.01$) は有意であった。性差の主効果 ($F(1, 136)=0.04, n.s.$)、リアクタンス特性と性差の交互作用 ($F(1, 136)=0.26, n.s.$) に有意差は見られなかった。

他者勝手行為、過剰心配行為ともに居住形態による有意差は見られなかった。

8-2. リアクタンス下位尺度と居住形態による不快感についての検討

結果 8-1 より、居住形態とリアクタンス特性ではストレスに差は見られなかった。リアクタンス下位尺度ごとにも差が見られる可能性もあるため、リアクタンス特性の下位尺度「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「意思決定の自由」、「干渉への認知」それぞれと満足度を独立変数、満足度を従属変数とし二要因分散分析を場面ごとに行った。

8-2-1. 他者勝手場面

8-2-1-1. 情緒不安

感情的反発と居住形態を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 136) = 7.80, p < .01$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.04, n.s.$)、感情的反発と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 1.01, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と居住形態を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 136) = 7.04, p < .01$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.20, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 0.07, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と居住形態を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 136) = 0.63, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.10, n.s.$)、意思決定の自由と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 1.31, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と居住形態を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 136) = 17.66, p < .01$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.21, n.s.$)、干渉への認知と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 0.18, n.s.$) に有意差は見られなかった。

他者勝手行為で生起されるストレス「情緒不安」において、居住形態による有意差は見られなかった。

8-2-1-2. 怒り

感情的反発と居住形態を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 136) = 7.38, p < .01$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.71, n.s.$)、感情的反発と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 0.76, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と居住形態を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 136) = 4.70, p < .05$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 1.91, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 1.56, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と居住形態を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 136) = 1.66, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 1.07, n.s.$)、意思決定の自由と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 0.01, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と居住形態を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 136)=10.57, p<.01$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136)=1.88, n.s.$)、干渉への認知と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=0.00, n.s.$) に有意差は見られなかった。

他者勝手行為で生起されるストレス「怒り」において、居住形態による有意差は見られなかった。

8-2-1-3. 抑うつ

感情的反発と居住形態を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 136)=3.21, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136)=0.13, n.s.$)、感情的反発と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=0.44, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と居住形態を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 136)=3.19, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136)=0.61, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=0.18, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と居住形態を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 136)=0.28, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136)=0.22, n.s.$)、意思決定の自由と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=0.05, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と居住形態を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 136)=7.16, p<.01$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136)=0.58, n.s.$)、干渉への認知と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=0.00, n.s.$) に有意差は見られなかった。

他者勝手行為で生起されるストレス「抑うつ」において、居住形態による有意差は見られなかった。

8-2-2. 過剰心配場面

8-2-2-1. 情緒不安

感情的反発と居住形態を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 136) = 2.04, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.06, n.s.$)、感情的反発と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 0.25, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と居住形態を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 136) = 14.43, p < .01$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.18, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 0.25, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と居住形態を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 136) = 0.00, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.01, n.s.$)、意思決定の自由と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 0.00, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と居住形態を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 136) = 8.55, p < .01$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.05, n.s.$)、干渉への認知と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 1.11, n.s.$) に有意差は見られなかった。

過剰心配行為で生起されるストレス「情緒不安」において、居住形態による有意差は見られなかった。

8-2-2-2. 怒り

感情的反発と居住形態を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 136) = 9.89, p < .01$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.03, n.s.$)、感情的反発と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 0.09, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と居住形態を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 136) = 6.40, p < .05$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.15, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 0.01, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と居住形態を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 136) = 0.28, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.11, n.s.$)、意思決定の自由と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 2.67, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と居住形態を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 136)=4.15, p<.05$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136)=0.04, n.s.$)、干渉への認知と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=0.00, n.s.$) に有意差は見られなかった。

過剰心配行為で生起されるストレス「怒り」において、居住形態による有意差は見られなかった。

8-2-2-3. 抑うつ

感情的反発と居住形態を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 136)=1.16, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136)=0.29, n.s.$)、感情的反発と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=0.26, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と居住形態を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 136)=14.42, p<.01$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136)=0.01, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=0.03, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と居住形態を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 136)=0.64, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136)=0.51, n.s.$)、意思決定の自由と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=1.85, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と居住形態を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 136)=6.39, p<.05$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136)=0.02, n.s.$)、干渉への認知と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=1.09, n.s.$) 有意差は見られなかった。

過剰心配行為で生起されるストレス「抑うつ」において、居住形態による有意差は見られなかった。

9. 居住形態による満足度についての検討

9-1. リアクタンス特性下位尺度と居住形態による満足度についての検討

ありがた迷惑行為を受けた際の「ありがたさ」は居住形態で差があるのかを検討するため、居住形態とリアクタンス特性を独立変数、満足度を従属変数とした二要因分散分析を行った。

他者勝手行為においては、リアクタンス特性の主効果 ($F(1, 136)=0.48, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136)=1.95, n.s.$)、リアクタンス特性と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=3.50, n.s.$) に有意差は見られなかった。

過剰心配行為においては、リアクタンス特性の主効果 ($F(1, 136)=0.55, n.s.$)、性差の主効果 ($F(1, 136)=1.01, n.s.$)、リアクタンス特性と性差の交互作用 ($F(1, 136)=0.85, n.s.$) に有意差は見られなかった。

他者勝手行為、過剰心配行為ともに満足度におけり居住形態の有意差は見られなかった。

9-2. リアクタンス下位尺度と居住形態による満足度についての検討

結果 9-1 では、居住形態と満足度には関連が見られなかったが、場面やリアクタンス下位尺度によって差が見られる可能性もあるため、居住形態とリアクタンス下位尺度それぞれを独立変数、満足度を従属変数とした二要因分散分析を行った。

9-2-1. 他者勝手場面の満足度

感情的反発と居住形態を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 136)=3.74, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136)=2.84, n.s.$) は有意ではなかったが、感情的反発と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=4.29, p<.05$) に有意差は見られた。感情的反発と居住形態の交互作用に有意差が見られたため、単純主効果検定を行った。その結果、感情的反発の低群において居住形態の違いによって差が見られた ($p<.05$)。また、自宅生において感情的反発の高低によって満足度得点に差が見られた ($p<.01$)。満足度得点の差異については Figure 11 を参照。

直接的な自由回復の行使と居住形態を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 136)=0.28, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136)=2.09, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=0.94, n.s.$) に有意差は見ら

れなかった。

意思決定の自由と居住形態を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 136)=0.31, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136)=0.80, n.s.$) は有意でなく、意思決定の自由と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=4.80, p<.05$) に有意差は見られた。意思決定の自由と居住形態の交互作用に有意差が見られたため、単純主効果検定を行った。その結果、意思決定の自由において居住形態の違いによる満足度得点の差が見られた ($p<.05$)。満足度得点の差については Figure 12 を参照。

干渉への認知と居住形態を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 136)=0.00, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136)=1.77, n.s.$)、干渉への認知と居住形態の交互作用 ($F(1, 136)=0.13, n.s.$) に有意差は見られなかった。

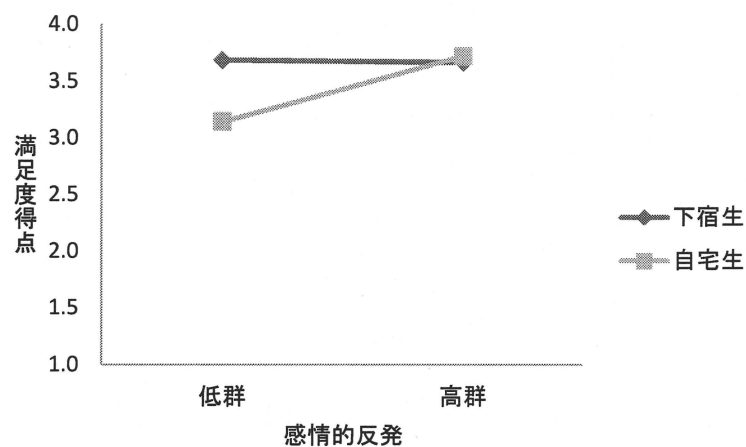


Figure 11 他者勝手行為における感情的反発と居住形態による満足度得点の差異

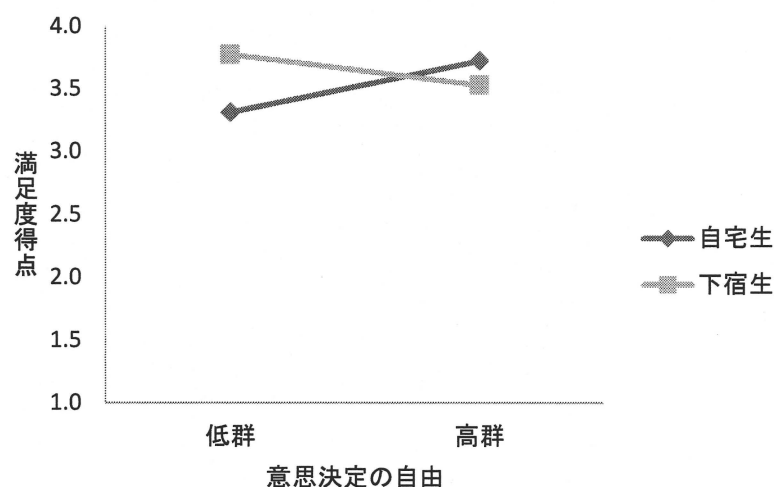


Figure 12 他者勝手行為における意思決定の自由と居住形態による満足度得点の差異

他者勝手行為において生起される満足度における居住形態の影響は、リアクタンス特性下位尺度「感情的反発」と居住形態、「意思決定の自由」と居住形態の交互作用のみ有意であった。

9-2-2. 過剰心配場面の満足度

感情的反発と居住形態を独立変数とした場合において、感情的反発の主効果 ($F(1, 136) = 4.93, p < .05$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 1.57, n.s.$)、感情的反発と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 1.58, n.s.$) に有意差は見られなかった。

直接的な自由回復の行使と居住形態を独立変数とした場合において、直接的な自由回復の行使の主効果 ($F(1, 136) = 0.50, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 1.21, n.s.$)、直接的な自由回復の行使と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 0.19, n.s.$) に有意差は見られなかった。

意思決定の自由と居住形態を独立変数とした場合において、意思決定の自由の主効果 ($F(1, 136) = 11.33, p < .01$) が有意であった。居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 0.46, n.s.$)、意思決定の自由と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 1.83, n.s.$) に有意差は見られなかった。

干渉への認知と居住形態を独立変数とした場合において、干渉への認知の主効果 ($F(1, 136) = 0.20, n.s.$)、居住形態の主効果 ($F(1, 136) = 1.32, n.s.$)、干渉への認知と居住形態の交互作用 ($F(1, 136) = 1.13, n.s.$) に有意差は見られなかった。

過剰心配行為において生起される満足度における居住形態の有意差は見られなかった。

第6章 本調査：考察

1. 受け手のリアクタンスの特性とストレスの関連

1-1. 他者勝手行為におけるリアクタンス特性

他者勝手行為においては Table 7 より不快感の指標であるストレスとリアクタンス特性の関連が示された。また下位尺度間の相関係数 Table 9 により、「感情的反発」、「干渉への認知」がストレス下位尺度の全てに正の相関、「直接的な自由回復の行使」が「情緒不安」、「怒り」と正の相関を示した。

相関係数だけでなく、実際にリアクタンス特性の反発の違いが見られるかを検討するため、リアクタンス特性下位尺度と満足度を独立変数、ストレス下位尺度をそれぞれ従属変数とし分析を行った。他者勝手場面では、ストレス下位尺度「情緒不安」、「怒り」、「抑うつ」のそれぞれに、リアクタンス下位尺度の「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」の主効果が有意であった。

これらのことから、ありがた迷惑行為を受けた際にリアクタンスが喚起され、不快感の指標であるストレスが高くなる可能性が示唆された。また、他者勝手行為ではリアクタンス特性の「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」が不快感を高めている可能性を示したと言える。

今回設定した他者勝手行為の場面は、親によって就職か進学を迫られた際、自分自身でできることや決めることを先に決められる好意である。そのため、受け手は将来を選択する権利や自由を失うため行為者に対して感情的になることが考えられる。また、親への好意を干渉として捉えてしまい、好意を「自分でできるのに勝手に決められた」というような反抗心が生起したと考えられる。そのため、リアクタンス特性の感情的に反発を示す「感情的反発」や、干渉される事を脅威として感じる「干渉への認知」が特に影響したのではないかと考えられる。また、親に先に決められることで、今後の自分自身の選択や行動が制限されると感じ、その自由を回復させようとしたことが考えられる。そのため自由を直接回復しようとする内容を示す「直接的な自由回復の行使」が影響したと考えられる。

以上のことから、他者勝手行為ではリアクタンス特性の反発によって不快感を高めていることが示され、リアクタンス特性の中でも「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」が関係していると言える。「干渉への認知」は仮説と異なるが、その他のリアクタンス特性は仮説を支持しているため、仮説 1 は支持されたとと言える。

1-2. 過剰心配行為におけるリアクタンス特性

過剰心配行為においては、Table 8 より不快感の指標であるストレスとリアクタンス特性に弱い正の相関関連を示した。また、ストレスと満足度には弱い負の相関が示された。

下位尺度間の相関係数 Table 10 より、「直接的な自由回復の行使」と「干渉への認知」がストレス尺度の下位尺度全てに正の相関を示した。このことから、リアクタンス特性の中でも「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」が過剰心配行為における不快感を高めていることが示された。

相関係数だけでなく、実際にリアクタンス特性の反発の違いが行為によって違いが見られるかを検討した。リアクタンス特性下位尺度と満足度を独立変数、ストレス下位尺度をそれぞれ従属変数とし分析を行った結果、剰心配場面では、ストレス下位尺度それぞれに対し、「直接的な自由回復の行使」の主効果が見られた。過剰心配行為で生起する不快感は共通して「直接的な自由回復の行使」が影響していることが示されたと言える。

想定した過剰心配行為では、親が子ども（受け手）の体調を心配し、家への帰宅を促すものである。受け手は自身の判断と体調管理によって決定した行動に対して、親が過剰に心配し家に帰るよう促す好意は、自身の決定を覆すものであり「干渉された」と捉えてしまうことが考えられる。また、心配されるという好意を素直に受け入れることは、受け手のこれから行動を制限するものであるため、その制限を解こうとしよう反発としたと考えられる。そのため、過剰に心配されることによって、自身に強く干渉されていると感じやすくなり「干渉への認知」が影響し、自身への干渉や制約を解放しようとして「直接的な自由回復の行使」の主効果が見られたと考えられる。

よって、過剰心配行為における受け手の反発は「直接的な自由回復の行使」と「干渉への認知」の関係が明らかとなった。過剰心配行為において「干渉への認知」の影響は見られたが、予想していた「意思決定の自由」の影響は見られなかったため、仮説 2 は一部支持という形となった。

1-3. リアクタンス特性「意思決定の自由」について

ストレスを従属変数にした Table12-3、Table14-3 より、また、ストレス下位尺度を従属にした結果 4-1、4-2、4-3、において、リアクタンス特性下位尺度の「意思決定の自由」の有意差は見られず、仮説 2 は一部支持されなかった。

意思決定の自由の内容は「自分の意志で振る舞えることに満足する」、「自分がどのように行動したらよいかは、自分で判断できる」などの内容で構成されており、本来ならば自身で決断する、または意思決定の場面における反発で構成された下位尺度である。しかし、今回はどの場面においても有意差は見られなかった。

これは調査対象者にとって、その話題が受け手にとって重要なのか、そして自身が決定したい話題であるのかが関係していると考えられる。今城（1994）は、リアクタンスの測定において、その問題をどう考えるかを自分で決定したいという「自己決定欲求」を測定している。この欲求が満たされていないと強いリアクタンス反応は期待できないとされていることから、このありがた迷惑行為場面において自身で決定したいという欲求はそこまで高くなかったことが考えられる。

今回、設定した場面には「就職、進学に関する場面」と「体調不良について過剰に心配されるが友人との飲み会に行く」というものであった。本来ならば、大学生において自身の進路選択や友人との付き合いというものは重要であるため、自身で決定し行動したいと考えるはずである。しかし、今回の調査対象者の多くは大学1・2年生である。大学受験を終え、まだ就活を始めるには早い時期である1・2年生にとって、就職などの進路選択場面は、あまり実感が湧かなかった可能性がある。また、過剰心配行為における場面では、「体調を心配してくれる親」というものは純粋にありがたい存在であり、いくら受け手が自身で決定した内容を覆されても、それほど反発は生じなかったことが考えられる。

以上のことから、受け手自身の自己決定欲が生じられなかったために、「意思決定の自由」による影響が見られなかったことが考えられる。

1-4. 過剰心配行為における「直接的な自由回復の行使」と「干渉への認知」の交互作用

満足度、リアクタンス下位尺度をそれぞれ独立変数、ストレスを従属変数とした場合、過剰心配行為において交互作用が見られた。

ストレスを従属にし、リアクタンス特性下位尺度「直接的な自由回復の行使」と満足度の交互作用を表した Figure1 により、満足度低群かつリアクタンス高群のストレス得点は有意に高い結果となった。しかし、満足度とストレスの関係は、そもそも相関係数において負の相関が示されており、満足が低ければストレスが高くなるのは当然のことと言える。また、リアクタンスの下位尺度である「直接的な自由回復の行使」の項目は「人からする

などと言われたら敢えてやらない」などの直接的な自由回復を行うものであり、このようなリアクタンス特性が高いかつ満足度が低い場合、ストレス得点が有意に高くなるのは必然とも言える。また、干渉への認知と満足度に交互作用が有意であった **Figure2** においては、満足度高群かつ干渉の認知の高群におけるストレス得点が有意に高かった。干渉への認知は「人から指図されている気がする」などの干渉を脅威だと感じやすい人であることが予想される。しかし、過剰心配行為は「体調の悪い自分を心配してもらえる」という場面であり、相手の好意を認知しやすい場面でもあるため、それに対する満足や感謝も高くなったと考えられる。

以上のことから、過剰に心配される場面において、自身が干渉されていると感じ自由を回復したいと考えている反面、親が自分自身の心配をしてくれていることに感謝していると考えられる。これは、ポジティブな感情とネガティブな感情が同時に生起しアンビバレントな状態であったと考えられるため、過剰心配行為は本研究のありがた迷惑行為の定義に沿った結果となったと言える。

また、満足度とリアクタンス下位尺度を独立変数、ストレス下位尺度を従属変数にした分析にもこのような交互作用が見られ、**Figure3**、**Figure4** にも同様の結果が見られた。これらも上記と同じ考察でこのような結果になったことが考えられる。

2. 不快感と満足度の検討

2-1. 他者勝手行為の不快感と満足

情緒不安は、リアクタンス下位尺度の「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」による主効果が見られ、これらの3つの下位尺度が情緒不安に影響を与えていることが示された。

怒りは、他者勝手行為における感情的反発と同じように、リアクタンス下位尺度の「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」による主効果が見られ、これらの3つの下位尺度が影響を与えていることが示された。

抑うつは、他のストレス下位尺度と同様にリアクタンス下位尺度の「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」による主効果が見られ、これらの3つの下位尺度が影響していることが示された。

結果 3-1 より、他者勝手行為の不快感に影響を与えていると考えられる「感情的反発」、

「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」による主効果が有意であったことから、他者勝手行為において生起される不快感は情緒不安、怒り、抑うつで構成されていることが示された。また、満足度による主効果は見られなかったことや、相関係数より、ストレス下位尺度の怒りはリアクタンス下位尺度の全て正の相関を示していたため、他者勝手行為は、行為者が相手のために想っての行動であっても、その好意が受け手の主体性を考慮しないものであるため不快感を生起させていると考えられる。

他者勝手行為では、満足度の影響があまり見られず不快感だけが高い部分も見受けられた。これは、ありがた迷惑行為の中でも他者勝手行為は迷惑行為に近い概念であることが考えられる。他者勝手行為は受け手の力で選択し決めることのできるものを好意によって直接制限してしまうものである。特に青年期では自立も関わり、自身の立場や確固たる主張などを持っている受け手もいることが考えられる。そのため、いくら好意が関係していたとしても、それに対する反発も強く、このようにストレス反応が見られたのではないだろうか。

他者勝手行為は好意が関係していたとしても、十分ストレスターとなり不快感を生起させている可能性が示されたと言える。

2-2. 過剰心配行為の不快感と満足

情緒不安は、「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」の主効果、直接的な自由回復の行使と満足度、干渉への認知と満足度の交互作用が見られた。この交互作用は考察 1-4 と同じく満足度を従属変数にしていると考えられる。

怒りは、「感情的反発」、「直接的な自由回復の行使」の主効果が示された。また、結果 4-2 より、過剰心配行為における怒りでは満足度的主効果が見られた。

抑うつは、「直接的な自由回復行使」、「干渉への認知」の主効果、直接的な自由回復の行使と満足度、干渉への認知と満足度の交互作用が見られた。この交互作用は考察 1-4 と同じく満足度が影響していると考えられる。

結果 3-2 より、過剰心配行為に影響与えているリアクタンス特性は「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」であると考えられる。この「直接的な自由回復の行使」、「干渉への認知」の主効果が見られる不快感の情緒不安と抑うつは、過剰心配行為で生起される不快感を構成していることが考えられる。また、ストレス下位尺度において満足度の効果

が見られることから、過剰心配行為における不快感は、他者勝手行為の不快感とは違い、リアクタンス特性よりも満足度が影響していると考えられる。

相関係数より、ストレスと満足度には負の相関が有意であったことも考慮すると、過剰心配行為ではリアクタンスによる反発によって不快感を高めているが、その好意をどれだけ認知しているのかによって不快感を減少させていると考えられる。これは、今回設定した過剰心配行為は「行為者が受け手のことを思い心配する」という行為のため、その好意への理解や感謝や満足も得られやすい行為である。そのため、ストレス反応は他者勝手行為とは異なり、苛立ちなどの怒りなどよりも困惑や戸惑いといった情緒不安や抑うつなどのストレス反応が表出したと考えられる。

以上のことから、過剰心配行為は、同じありがた迷惑行為であっても下位尺度間の関係性が異なり、質としては別のものであることが示されたと言える。

考察 2-1、2-2 より、他者勝手行為における不快感と過剰心配行為における不快感の質の違いが示されたと言える。また、他者勝手行為では不快感の関連が見られたのに対し、過剰心配行為では、不快感と満足度による影響が見られた。同じありがた迷惑行為であってもストレス反応の表出が異なることから不快感の質の異なることが示されたと言える。以上のことから、仮説 3 は支持された。

3. 性差についての検討

他者勝手行為、過剰心配行為において、リアクタンス特性と性差を独立変数、ストレスを従属変数にし性差による差があるかどうかを検討した。結果としては、どちらの場面においてもリアクタンス特性の主効果のみが有意であり、性差に有意差は見られなかったため仮説 4 は支持されなかった。しかし、性差とリアクタンス特性の下位尺度を独立変数、ストレス下位尺度をそれぞれ従属変数とした際、性差による影響が見られたため、性差における考察を以下に述べるものとする。

3-1. 他者勝手行為における性差

情緒不安は、感情的反発と性差の交互作用、直接的な自由回復の行使と性差による交互作用が見られた。感情的反発と性差の交互作用は Figure7 より、女性の方がリアクタンス

特性の感情的反発による情緒不安得点に差があることが示された。直接的な自由回復の行使による交互作用は Figure8 より、女性においてリアクタンス特性の直接的な自由回復の高低によって差が見られた。

怒りでは感情的反発と性差に交互作用が見られ女性においてストレス得点が有意であった。また、抑うつでは直接的自由回復における性差の主効果が見られた。

他者勝手行為において、男性よりも女性の方がストレス得点が高いという結果となり、仮説 4 は支持されなかった。

しかし、他者勝手行為において満足度を従属変数に分析を行ったところ、リアクタンス特性と性差の交互作用に有意差が見られた。他者勝手行為におけるリアクタンス特性と性差の交互作用は Figure10 より、リアクタンス特性の高群において男女で満足度得点の差が有意であり、また、女性においてはリアクタンス特性の高低によって満足度の得点に差が見られた。これは、女性は満足度が高く、その好意に対して感謝していることという結果となった。これは、仮説 4 を支持するものであり、女性はその好意に満足しながらも不快感を抱いているという結果となった。

このように女性において影響が見られたのは、行為者と受け手の関係性が影響していることが考えられる。今回の行為者は親と設定したが、母親・父親などの設定はしていない。しかし、多くの調査対象者は行為者を母親と設定して回答した可能性が考えられる。水元・山根（2010）によると、男性は親との距離を置くようにして親から分離・独立していき、女性は親、特に母親との距離を保ちながら自立するというプロセスを示唆していることから、男性と親との関係、女性と親との関係において違いがあることは考えられる。しかし、青年期における女子と母親の関係はまた異なるものであることが感ぜられる。青年期女子と母親の関係は、父親との関係と比較すると協力的で愛されている感覚を持てる一方でその近さゆえに母親と権威的・批判的であると感じ母親に批判的になりやすく、「平等性と権威」、「親密性と葛藤」が拮抗しがちであると言う（Youniss& Smollar, 1985）。このような青年期女子の発達的な特徴から、女性においてのみこのような結果となったと考えられる。

3-2. 過剰心配行為における性差

過剰心配行為においては、怒りに対して感情的反発と性差の主効果、直接的な自由回復の行使と性差の主効果、意思決定の自由における性差の主効果が見られた。

抑うつにおいて直接的な自由回復の行使において性差の主効果が見られた。過剰心配場面の怒りは、リアクタンス特性よりも性差における影響を受けていることが示されたと言える。

過剰心配行為においては男性に比べ女性の方がストレス得点が高く、ストレスの中でも苛立ちなどの怒りを感じていることが示され、仮説 4 は支持されなかった。

しかし、この過剰心配行為においても満足度と性差の分析を行ったところ、全てにおいて性差の主効果が見られた。特に女性においては過剰に心配されることによって、自分が心配されていることに満足を抱いているという結果となり、仮説 4 を支持する形となった。これらも、Youniss & Smollar (1985) の青年期における女子と母親の関係は、父親との関係と比較して協力的で愛されている感覚を持てる一方でその近さゆえに母親と権威的・批判的であると感じ母親に批判的になりやすく、「平等性と権威」、「親密性と葛藤」が拮抗しがちであると言う青年期女子の発達の特徴より、愛されている感覚と批判的な感覚が混在するような結果となったと考えられる。

考察 3-1、3-2 より女性に比べて男性に比べて不快感も満足度も高いという結果が示され、仮説 4 は一部支持、一部支持されないという結果となった。

4. 居住形態 の検討

居住形態とリアクタンス特性とストレスの関連について分析した。その結果、他者勝手行為、過剰心配行為においては、リアクタンスの主効果のみが見られた。居住形態の主効果は示されなかった。また、リアクタンス下位尺度と居住形態をそれぞれ独立変数にし分析を行った際にも、居住形態における効果に有意差は見られなかった。

ありがた迷惑行為において、不快感の指標であるストレスは居住形態と関連がなかったことが示された。ありがた迷惑行為というのは、相手の好意を認知しやすい行為のため迷惑度は、他の迷惑行為に比べて低いものであると考えられる。そのため、居住形態においてそれほど大きな差は見られなかったことが考えられる。

また、居住形態と満足度について検討を行った。結果としては、他者勝手行為において、感情的反発と居住形態の交互作用、意思決定の自由と居住形態の交互作用が見られた。過剰心配行為においては、感情的反発の主効果と意思決定の自由における主効果が見られ、居住形態の主効果は見られなかった。

他者勝手行為における交互作用は、Figure11、Figure12 より自宅生の影響によって得点差が多くなったことが考えられる。自宅生はリアクタンス反応が喚起されても、満足度が高い。これは女子学生の自宅生の割合が関係していると考えられる。考察3でも述べたように、この青年期女子の発達的特徴によってこのような結果となったと考えられる。自宅から通う女子学生は、親への行動や行為に対して満足も感謝もよくしているが、その発達的特徴のために批判的、反発的にもなっていることが考えられる。

第7章 今後の展望

1. ありがた迷惑行為

本調査ではありがた迷惑行為である他者勝手行為、過剰心配行為の2つの行為に焦点を当て検討を行った。結果としては、他者勝手行為における不快感はリアクタンス特性と関連が示され、過剰心配行為ではリアクタンス特性だけでなく、その行為に対する満足度をどれだけ認知しているのか明らかとなった。ありがた迷惑行為は好意が関係していたとしても、受け手の主体性が脅かされる他者勝手行為は不快感が高くなることが示され迷惑行為に近い概念であり、過剰心配行為においては満足度と不快感が混在するものとなり、本研究で定義するありがた迷惑行為に近いものであった。ありがた迷惑行為の受け手は施しを受けるだけの立場ではなく、自身の立場維持し、確固たる主張を持つ受け手であることが示された。相手のために想っての行為であっても、受け手の立場を尊重しない行為は不快感を高め、迷惑度を高める要因となると言えよう。

しかし、今回ストレス反応をありがた迷惑行為における不快感であると仮定した。本調査で使用したありがた迷惑行為の場面が本当にストレスャーであったかどうかの確認やリアクタンスとの関連について詳細な検討を行っていない。そのため、その場面がストレスャーでありそれにより起きた不快感であるのかの検討はできなかった。特に、過剰心配行為場面における内容では、親が体調不良を心配するという内容であるため、人によってはその好意を負担であると捉えなかった場合も考えられる。そのため、今後は場面の想定をした際、その好意が負担であったかどうかを確認することが求められる。

また、本研究では、ありがた迷惑行為の全てを明らかにできたわけではない。今回の調査では、予備調査から得た4つのカテゴリーのうち2つに焦点を当てて調査を行った。本研究の結果でも示されたように、同じありがた迷惑行為であっても、その不快感や好意への満足は異なるものであるため、他の要因なども関連していると予想される。特に4つめのカテゴリーである「大量物資行為」は、物を貰い過ぎることにより、その後の返報やその物を処理することに困惑することが考えられ、本研究で用いたリアクタンス理論では説明できない可能性もある。

ありがた迷惑行為は迷惑行為でありながら援助行動でもあり、迷惑行為だけの観点だけでなく、援助行動研究の観点も踏まえながら考察する必要がある。本研究においても両方の観点から考察を行ったが、今回はありがた迷惑の不快感を中心に検討を行い、満足度や

感謝などの検討が不十分である。今後、ありがた迷惑行為研究を進めるにあたっては、本調査で検討しなかった残り 2 つのカテゴリーについても検討していくこと、また、ありがた迷惑行為の満足度についても詳細に検討していく必要がある。

2. リアクタンス特性と不快感

分析結果より、リアクタンス特性と不快感は関連を示したことから、ありがた迷惑行為における不快感は心理的リアクタンス理論によって説明できることが明らかとなった。

ありがた迷惑行為を受けることで自身の選択や意思決定などが自由にできなくなるというストレスにより、その自由を回復しようとリアクタンスが生起したことが考えられる。これらのことから、個人のリアクタンス特性を検討することは、迷惑行為であるかどうかを判断しているひとつの要因として考えることができる。

しかし、今回の研究ではリアクタンス特性下位尺度の「意思決定の自由」に有意差が見られなかった。これは、質問紙の場設定場面において、リアクタンス反応が喚起される前提条件を踏まえていなかったことが要因としてあげられる。リアクタンスが喚起される条件として、話題の重要性、失われる自由への魅力などがある。今回の場面では、他者勝手行為場面においては進路についての話題、過剰心配行為場面においては飲み会に参加する話題であった。今後、リアクタンス特性を検討する際にはその場面の重要性や意思決定欲があるのかなどの検討も必要であると考えられる。

3. 性差と親子関係について

本調査のありがた迷惑行為における不快感に性差が見られた。特に過剰心配行為では、女性において不快感に差が見られたことから、過剰心配行為においては性差を考慮していくことが必要であろう。また、今回は設定場面を親子関係にして測定したが、青年期女子と青年期男子においては精神的自立のモデルが違うために、このような差が見られたと考えられる。ありがた迷惑行為で受け手と行為者を親子で設定する際には、性差が見られることを考慮して検討を行っていくべきであろう。また、今回は母親・父親というような設定を行わなかった。調査対象者が行為者を母親と想定して回答したのか、父親として回答したのかは定かではないが、今後、親子関係においてありがた迷惑行為を測定する際は、

親への性差も考慮することが必要になってくるだろう。

また、友人や先輩・後輩、上司部下などの多くの関係性などによって、ありがた迷惑行為への不快感や満足感も変化することが考えられる。しかし、全く知らない者から行われるありがた迷惑行為などもあるため、今後は関係性に焦点を当てた検討も求められる。ただし、知らない者との間で生起するありがた迷惑行為は、ありがた迷惑行為の場面に特に注意を払う必要がある。ありがた迷惑行為の前提にはその行為の「ありがたさ」を認知していることが求められる。迷惑認知の研究において小池・吉田（2005）は、ある程度の親密さがない関係においては、その行為の迷惑認知度が高まると指摘している。そのため、全く知らない他者との関係性におけるありがた迷惑行為を検討する際には、さらなるありがた迷惑行為の収集を行い考慮していくことが重要であると言える。

4. 調査方法において

予備調査で得たありがた迷惑行為は女性から得た記述ばかりであり、男性による記述は少なく、女性の価値観から見たありがた迷惑行為になった可能性がある。そのため、今後とも女性・男性から多くのありがた迷惑行為を収集し精査していくことが求められる。

また、居住形態によってリアクタンス特性や不快感、満足感において差が見られないかを検討が有意差はほとんど見られなかった。受け手と行為者を親子関係として想定したため、親と共に生活している自宅生と親元から離れて生活している下宿生では何らかの差が見られると予想したが結果は見られなかった。親子関係を取り扱うにあたって、またありがた迷惑行為に焦点を当てて検討する際には、居住形態による影響はないと考えられる。

しかし、本調査ではありがた迷惑行為を受けた回数について質問しているが、記述漏れが多く分析に加えることができなかった。これは、ありがた迷惑行為は最終的には許せてしまうものが多く、記憶に残りにくかったことが考えられる。ありがた迷惑行為のを受けた回数や経験は自宅生・下宿生に関わらず覚えていない可能性もあり、それらについても今後は改善していく必要があるだろう。

引用文献

- 相川充 1995 対人状況での被援助に伴う心理的負債の規定因に関する研究 広島大学大学院教育学研究科博士論文（未公刊） p110
- 石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛 2000 社会的迷惑に関する研究（2） 迷惑認知の根拠に関する分析 名古屋大学大学院教育発達科学研究紀要（心理発達科学） 47 p25-33
- 今城周造 1999 リアクタンス 中島義明・安藤清志・子安増夫・坂野雄二・茂樹算男・立花政夫・箱田裕二（編）心理学辞典 有斐閣 p877
- 一言英文・新谷優・松井淳子 2008 自己の利益と他者のコスト—心理的負債の日米間比較— 感情心理学研究 16 p3-24
- 池田幸恭 2006 青年期における母親に対する感謝への心理状態の分析 教育心理学研究 54 487-497
- 泉井みずき 2009 被援助時の不快感情の発達：いつから助けられることを不快に感じるのか 学校教育学研究論集（20） 1-15
- 小池はるか・吉田俊和 2005 対人的迷惑行為実行頻度と共感性との関連—受け手との関係性についての検討— 東海心理学研究 第1巻 p3-12
- 小池はるか・吉田俊和 2007 共感性と対人迷惑認知，迷惑認知の根拠との関連—行為者との関係性による違いの検討 パーソナリティ研究 第15巻 第3号 p265-267
- Lazarus, R.S., & Folkman, S. 1984 Stress, appraisal, and coping. New York : Springer Publishing Company. 本明寛・春木豊・織田正美（監訳）1991 ストレスの

- 真船浩介・鈴木綾子・大塚泰正 2006 大学生におけるストレスの特徴：認知評定、及び心理的ストレス反応との関連の検討 学校メンタルヘルス 第9巻 57-63
- 松浦 均 2007 不適切な援助を受けた場合の被援助者の感情について 人文学部研究論集 17 29-41
- 水木深喜・山根律子 2010 青年期から成人期への移行期への女性における母親との距離の意味：精神的自立・精神的適応との関連から 発達心理学研究 21 第3号 p255-265
- Nadler, A. & Fisher, J. D. 1986 The role of threat to self esteem and perceived control in recipient reactions to aid : Theory development and validation. In L. Berkowitz (Ed.), Advances in experimental social psychology, Vol: 19. Academic press. 81-116
- 西平直喜・久世敏雄 1988 青年心理学ハンドブック 福村出版
- 西川正之 1998 援助研究の広がり、松井豊・浦光博（編） 人を助ける心の科学 116-148 誠信書房
- 尾関友佳子 1993 大学生用ストレス自己評価尺度の下位亭—トランスアクションナルな分析に向けて— 久留米大学大学院比較文化研究科年報 1 p95-114
- 斎藤和志 1999 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集（文学部編） 24 p67-77
- Schneider, W. 1998 Performance prediction in young children: Effects of skill, recognition and thoughtful thinking. Development, 72, 655-684

高井次郎 2012 吉田俊和・橋本剛・小川一美（編） 対人関係の社会心理学 ナカニシヤ出版 p171-182

高木修 1998 人を助ける心 援助行動の心理学 サイエンス社 p55-58 p109

高木雪子・吉見恒平・深田博己 2005 広島大学心理学研究 リアクタンス特性尺度の検討 第5号 p51-68

山岸明子 2000 女子青年によって再構成された幼少期から現在にかけての母親との関係 青年心理学研究 12 31-46

吉田俊和・元吉忠寛・北折充隆 2000 社会的迷惑に関する研究（3）－社会考慮と信頼感による人の分類と迷惑行為との関連－ 名古屋大学教育学部紀要（心理学） 第47巻 p35-45

吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆 1999 社会的迷惑に関する研究（1） 名古屋大学教育学部紀要（心理学） 第46巻 p53-73

吉田俊和・斎藤和志・北折充隆 2009 社会的迷惑の心理学 ナカニシヤ出版 p11-107

Youniss, J., & Smollar, J. 1985 Adolescent relations with mothers, fathers, and friends. Chicago : The university of Chicago Press.

謝辞

2年間の集大成として、この修士論文を製作するにあたり、多くの人的協力とご支援をいただきました。質問紙作成や論文執筆にあたり、南学先生には、ご多忙の中、論文執筆や分析までの的確なご指導をいただきました。また、ご相談にお伺いした際にも真摯に耳を傾けてくださり、この修士論文を書き上げることができたのも、南先生からのご指導、ご支援があったからこそだと思います。心より感謝申し上げます。

教育心理学講座、瀬戸美奈子先生、松浦均先生、中西良文先生には様々な貴重なご意見、励ましをいただき、研究の発展につなげることができました。深く感謝を申し上げます。

また、南ゼミ所属のみなさま、大学院学校教育専攻学校教育専修のみなさまには、研究についての様々なご示唆、暖かい励ましをいただきました。ここにお礼申し上げます。

さらに、調査の実施においてご協力いただきました、学生のみなさまに心より感謝申し上げます。

今回の修士論文執筆で得たものは数え切れず、また一人では修士論文を完成させることができなかつたと痛感しております。ここで挙げた人たち以外にも、本当にたくさんのご協力をいただきました。短いですが、感謝の意をここに示します。

付属資料

1. 予備調査で記述されたありがた迷惑行為

	記述された項目
1	頼んでいないのに望んでもないことを勝手にされた。後で続きをしようとしたら勝手にされ、よくわからなくなった
2	ある人に必要な資料を集める役割を頼まれた。集めるのが難しい内容だったので、休日を使って調べ、当日集めた資料をとりに行った。すると、頼んだ人が「一人だと大変だと思って自分も集めた」と言って、私の資料は必要なくなった。
3	自分ができること、挑戦してみたいことを他の人がやる
4	友達のいざこざに別の友達がわざわざ仲介しようとしたこと
5	バイトでお客さんが運んでいるグラスを取ってくれるが、バランスを崩してしまった
6	バイトの荷物の前出しで段ボールをどれだけつぶせるか話していた。他のバイトの人が私が接客しているときに、つぶして捨ててくれていた。どれだけ貯まるのかみたかった
7	バイト時にドリンクを運んでいて、それをお客さんが取ろうとしてバランスを崩した
8	バイト中、私は自分の手順でやろうとしたのに、中途半端に手伝ってやり方も違っていたため二度手間になった
9	お客さんが好意で料理や食べ物をおぼんから取ろうとしてくれる。でも、そのときにバランスを崩してしまった
10	休もうと思っていた授業で友達から「席取ったよー」という旨のメールが来たこと
11	飲み会の際に、代金を多めに支払ってくれたが、そのせいで一人当たりの金額が曖昧になり、計算が面倒になった
12	必要な準備物を作る時、相手が連絡もなく作っていて自分と被ってしまった。作り損になってしまった。
13	プリントを印刷するときに自分なりのやり方があるのに、こっちの方が効率がいいと言われ順番がごちゃごちゃになった。
14	心配メールがくる。そんなに落ち込んでないのに毎日止めてもくる
15	軽く落ち込んでいただけなのに、ものすごく悩んでいるように先生に見られ親に言われた
16	私のためを思ってくれることはわかるが、私は別にやってほしくなかった。むしろ放っておいてほしかった。悩んでいる自分に対してアドバイスとか
17	別に寒くもないのに寝ているときに布団を被せられ、朝暑くなった
18	落ち込んでる時にたくさんお菓子をもらった、うれしいけど食べきれないし太るしちょっとだけ困った
19	1人になりたいときに限って、すごい心配される。逆に気を使って困る。
20	夜1人で帰るときに心配だからと送っていく何度も言われた。1人で帰れる。
21	自転車なのに車で動く人の都合を重視の計画になっていた
22	仲のいいグループといったときに、何をするにも一緒じゃないとダメという雰囲気はどうかと思った。仲がいいのはいいんだけど
23	時間がないのに熱いココアを入れてもらった
24	そんなにお腹が空いていないのに、たくさんのお菓子をもらってしまった。残すのも悪かったので食べた。
25	1人暮らしで、親からたくさん物が送られてくる。

2. 予備調査用の質問紙

<調査へのお願い>

この調査は、対人関係場面における迷惑行為についてお聞きするものです。

このアンケートの回答結果は全て統計的に処理され、個人の回答が問題とされたり、他の人の目に触れたりするようなことは一切ありません。回答者の方に個人的な迷惑をおかけすることは決してありません。お手数ですが、ご協力をお願いいたします。

なお、この調査に関してご意見や問題点がございましたら、下記までご連絡ください。

三重大学大学院 学校教育専修

土口 佳純 (E-mail: 211m005@m.mie-u.ac.jp)

学年()年
性別(男性 ・ 女性)
年齢()歳

1. あなたは、ありがた迷惑行為を受けたことがありますか？

(1. はい / 2. いいえ)

2. それはどのような迷惑行為でしたか？詳しく具体的に記述してください。

複数ある場合は、複数記述してくださってもかまいません。

3. その迷惑行為はどれくらい迷惑だと感じましたか？該当する部分に丸をつけてください。

複数回答がある人は、例のように質問2に矢印で示してください。

例. 1) ○○のようなことをされた→1, 2) □□がされた迷惑だと思った→3

1. 迷惑だと感じなかった
2. あまり迷惑だと感じなかった
3. 迷惑だと思った
4. かなり迷惑だと思った

3. 本調査用の質問紙

親子関係における意識調査へのお願い

この調査は、親子関係において生起する行動や思考についてお聞きするものです。この調査には正しい答えや望ましい答えといったものではありませんので、あなたの思った通り、率直に回答してください。質問はP1～P5まであります。

このアンケートの回答結果は全て統計的に処理され、個人の回答が問題とされたり、他の人の目に触れたりするようなことは一切ありません。

回答者の方に個人的なご迷惑をおかけすることは決してありません。

お手数ですが、ご協力をお願いいたします。

なお、この調査に関してご意見や問題点がございましたら、
下記までご連絡ください。

2012 年 12 月

三重大学大学院教育学研究科 学校教育専攻 学校教育専修

土口 佳純 E-mail : 211m005@m.mie-u.ac.jp

学部()
学年()年
性別(男性 ・ 女性)
年齢()歳

Ⅱ. あなたは以下の場面のような出来事に遭遇しました。その際に、あなたはこの行いにどのような印象を抱くのか、該当するものに○をつけてください。

あなたはそろそろ先の進路を決めなくてははいけません。
就職活動を行うのか、それとも進学するのか、あなたの中ではまだ決まっていません。
ある日、あなたの親は進路について「この先どうするのか？なにをやっていききたいのか？」と質問をしてきました。答えを出さないまましていると、
あなたの親は「それじゃあ、この就職活動サイトに登録しておく」言われ、
そこで会話は終了しました。

1. 上の場面に遭遇した際、あなたはどのような気持ち、気分になりますか？
以下の項目 1~23 について、あなたがどの位当てはまるか、「当てはまらない」から「当てはまる」のうち1つに○を付けて下さい。

1	2	3	4	5
当てはまらない	やや当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	当てはまる

1.	悲しい気持ちだ	1	2	3	4	5
2.	さみしい気持ちだ	1	2	3	4	5
3.	泣きたい気分	1	2	3	4	5
4.	気分が落ち込み、沈む	1	2	3	4	5
5.	心が暗くなる	1	2	3	4	5
6.	不機嫌で怒りっぽい	1	2	3	4	5
7.	怒りを感じる	1	2	3	4	5
8.	憤まんがつのる	1	2	3	4	5
9.	いらいらする	1	2	3	4	5
10.	不愉快な気分だ	1	2	3	4	5
11.	恐怖感を抱く	1	2	3	4	5
12.	重苦しい、圧迫感を感じる	1	2	3	4	5
13.	びくびくしている	1	2	3	4	5
14.	気持ちが張りつめている	1	2	3	4	5
15.	不安を感じる	1	2	3	4	5
16.	行動に落ち着きがなくなる	1	2	3	4	5
17.	やるべき事に手がつけられない	1	2	3	4	5
18.	根気がなくなる	1	2	3	4	5
19.	むやみに動き回り、じっとしていられない	1	2	3	4	5
20.	誰かに慰めてほしい、支えてほしいと思う	1	2	3	4	5
21.	頭の回転が鈍く、考えがまとまらない	1	2	3	4	5
22.	気がかりなことがすぐに頭に浮かぶ	1	2	3	4	5
23.	話や行動にまとまりがないと思う	1	2	3	4	5

2. 上の場面に遭遇した際、あなたは親に対して以下のような気持ちになりますか？
 以下の項目 1~12 について、あなたがどの位当てはまるか、「当てはまらない」から「当てはまる」のうち1つに○を付けて下さい。

1 当てはまらない	2 やや当てはまらない	3 どちらでもない	4 やや当てはまる	5 当てはまる
--------------	----------------	--------------	--------------	------------

- | | | | | | |
|-------------------------------------|---|---|---|---|---|
| 1. 自分が困ったときに相談にのってくれるのは嬉しい..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. 親が自分のことを励まそうとしてくれるのは嬉しい..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 親が自分のことを心配してくれるので嬉しい..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 自分のためを想ってくれるのは嬉しい..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. 今の自分があるのは親が心配してくれたおかげだと思う..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6. これは親の応援のひとつだとは思ふ..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 7. 自分のためにしてくれたことには感謝している..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 8. 親の子どもを心配してくれる気持ちは理解できる..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 9. 親は子どもの世話を焼くものだとは思ふ..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 10. 親が言っていることは正しいと思う..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 11. 親が自分のことを考えてくれる発言であるとは思ふ..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 12. 親が自分のために何かしてくれていることは理解している..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

3. 上記で示したような場面にはどれくらい遭遇したことがありますか？
 次の四角内の当てはまるものに○をつけてください。

- 1. 全くない
- 2. あまりない
- 3. どちらでもない
- 4. 少しある
- 5. 結構ある

Ⅲ. あなたは以下の場面のような出来事に遭遇しました。その際に、あなたはこの行いにどのような印象を抱くのか、該当するものに○をつけてください。

あなたは少し体調を少し崩していましたが、
 久々に会う友人に飲み会に誘われ、それに参加することにしました。
 親には飲み会があると伝えていましたが、飲み会が始まって2時間後くらいに
 親から電話がかかってきました。
 「もう夜も遅いし、体調も悪いのだから早く帰りなさい。体調は本当に大丈夫なの？」
 というように、はやめに帰るよう促されました。

1. 上の場面に遭遇した際、あなたはどのような気持ち、気分になりますか？
 以下の項目 1~23 について、あなたがどの位当てはまるか、「当てはまらない」から「当てはまる」のうち1つに○を付けて下さい。

1	2	3	4	5
当てはまらない	やや当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	当てはまる

1.	悲しい気持ちだ	1	2	3	4	5
2.	さみしい気持ちだ	1	2	3	4	5
3.	泣きたい気分	1	2	3	4	5
4.	気分が落ち込み、沈む	1	2	3	4	5
5.	心が暗くなる	1	2	3	4	5
6.	不機嫌で怒りっぽい	1	2	3	4	5
7.	怒りを覚える	1	2	3	4	5
8.	憤まんがつのる	1	2	3	4	5
9.	いらいらする	1	2	3	4	5
10.	不愉快な気分だ	1	2	3	4	5
11.	恐怖感を抱く	1	2	3	4	5
12.	重苦しい、圧迫感を感じる	1	2	3	4	5
13.	びくびくしている	1	2	3	4	5
14.	気持ちが張りつめている	1	2	3	4	5
15.	不安を感じる	1	2	3	4	5
16.	行動に落ち着きがなくなる	1	2	3	4	5
17.	やるべき事に手がつけられない	1	2	3	4	5
18.	根気がなくなる	1	2	3	4	5
19.	むやみに動き回り、じっとしてられない	1	2	3	4	5
20.	誰かに慰めてほしい、支えてほしいと思う	1	2	3	4	5
21.	頭の回転が鈍く、考えがまとまらない	1	2	3	4	5
22.	気がかりなことがすぐに頭に浮かぶ	1	2	3	4	5
23.	話や行動にまとまりがないと思う	1	2	3	4	5

2. 上の場面に遭遇した際、あなたは親に対して以下のような気持ちになりますか？

以下の項目 1~12 について、あなたがどの位当てはまるか、「当てはまらない」から「当てはまる」のうち1つに○を付けて下さい。

1 当てはまらない	2 やや当てはまらない	3 どちらでもない	4 やや当てはまる	5 当てはまる
--------------	----------------	--------------	--------------	------------

- | | | | | | |
|--|---|---|---|---|---|
| 1. 自分が困ったときに相談にのってくれるのは嬉しい・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. 親が自分のことを励まそうとしてくれるのは嬉しい・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 親が自分のことを心配してくれるので嬉しい・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 自分のために想ってくれるのは嬉しい・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. 今の自分があるのは親が心配してくれたおかげだと思う・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6. これは親の応援のひとつだとは思ふ・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 7. 自分のためにしてくれたことには感謝している・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 8. 親の子どもを心配してくれる気持ちは理解できる・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 9. 親は子どもの世話を焼くものだと思う・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 10. 親が言っていることは正しいと思う・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 11. 親が自分のことを考えてくれる発言であるとは思ふ・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 12. 親が自分のために何かしてくれていることは理解している・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

3. 上記で示したような場面にはどれくらい遭遇したことがありますか？

次の四角内の当てはまるものに○をつけてください。

1. 全くない
2. あまりない
3. どちらでもない
4. 少しある
5. 結構ある

質問は以上となります。
記入漏れがないかご確認下さい。

ご協力ありがとうございました。